

第6回

久留島武彦童話賞

子ども創作童話コンクール

受賞作品集

もくじ

▽ごあいさつ	4
▽玖珠町長 宿利政和	4

▽玖珠町教育委員会 教育長 梶原敏明	6
--------------------	---

▽久留島武彦記念館 館長 金成妍	8
------------------	---

▽絵本セラピスト 武岡寿美	10
---------------	----

小学生の部

 大賞	24
▽人間諸君、よく聞け 町中さくら	24

 佳作	27
▽ゆめと王さま 瀧石佑乃	27

選考委員特別賞	29
▽約束を信じて 後藤愛莉	29

中学生の部

読売新聞社賞

▽ 化小学校二年、ももちちゃん来たる！

諸井 理杏

33



大賞

▽ 人生日記

毛利 太河

40



佳作

▽ 羽に願いを

秋好 彩音

46

久留島武彦記念館館長特別賞

▽ ハンズ

来田 倫太郎

53

読売新聞社賞

▽ 託されたもの

土佐路 美優

59

高校生の部



大賞

▽ 昆虫革命

神谷 ましろ

72



佳作

▽人間のこと猫のこと

石井 里奈

.....



佳作

▽まほうのノート

佃 和佳奈

.....

選考委員特別賞

▽大きな木

二宮 果穂

.....

久留島武彦記念館館長特別賞

▽幸せのスパイス

戸田 舞

.....

読売新聞社賞

▽お空のお菓子屋さん

荒岡 美希

.....

107

101

98

93

88

【ごあいさつ】

「第6回久留島武彦童話賞」子ども創作童話コンクール」によせて

玖珠町長
宿利 政和
しゅくり まさかず

「第6回久留島武彦童話賞」子ども創作童話コンクール」で受賞されました皆様、そして、ご家族、学校関係者の皆様に心からお祝いを申し上げます。

さて、このコンクールは日本のアンデルセン・久留島武彦先生の生誕145年を記念して始まったコンクールで、童話をとおして児童教育を実践した久留島先生の精神を受け継ぎ、児童文学の一層の発展を願って創設したものであります。

第6回を迎える今回は、小学生の部8編、中学生の部7編、高校生の部26編の合計41編の作品が寄せられました。入選された作品はもちろん、いずれの作品も独創的で感受性に富み、まさに、久留島先生が掲げた童話の三大要素「興味」、「夢」、「教え」がたくさんつまつたすばらしい作品の数々でした。

玖珠町は「自然を愛し子どもとともに夢を育み誇りを持てる心のふるさと 玖珠」を基本理念に、まち

づくりを進めております。久留島武彦の精神を継承していくことは子どもたちの未来を育むと信じております。

おすびに、選考にあたりご尽力いただいた選考委員をはじめ、多忙な中、応募を取りまとめていただいた学校関係者の皆様、当コンクールにご協力いただいた全ての関係者に厚くお礼申し上げますとともに、このコンクールに応募してくれた子どもたちの中から、将来の「久留島武彦」が生まれることを、心から期待しております。

【ごあいさつ】

「第6回久留島武彦童話賞」子ども創作童話コンクール」によせて

玖珠町教育委員会 教育長

梶原 敏明
かじわら としあき

「第6回久留島武彦童話賞」子ども創作童話コンクール」において受賞された皆様、そして、御家族の方々、このたびの受賞、誠にありがとうございます。心よりお喜び申し上げます。

さて、今回の皆さんの受賞作品では、「人と人の愛や友情」を描いて、人生にとっての大切な生き方が込められています。

作品の特徴として、皆さんは、実際に経験できないものを童話作品に描き、実際にそのような場面に出会った時の対処方法などが描かれております。

皆さんは、童話を創作する中で、人が人として共に生きていく上で必要な「教え」を、自ら考え、童話を通じて描くことで、自分自身の社会人に向けての生き方のアピールであり、まさしく、久留島武彦先生の教えにありますように、「童話は人生最初の哲学書」です。

このように、創作の世界に広がっている皆さんの作品を通じ、「童話」が持つ未来に向けての皆さんの力を実感しました。

また、「やさしさ」や「思いやり」など、力を合わせて困難を乗り越えていくように、お互いの違いを認め合って、ともに生きていこうという考え方など、社会性を高めたりするのに童話は重要な役割を果たしていると、感動を覚えました。

「久留島武彦童話賞」子ども創作童話コンクール」は、今年で第6回目を迎え、この賞を継続することができたのも、選考委員の皆様をはじめ、応募を取りまとめたいただいた学校関係者の皆様方の御理解、御支援をいただいているおかげであり、そして、何より、児童生徒の皆さんからの応募があつたからこそと、心より感謝申し上げます。

「多くの皆様方に、『温かみのある心のふれあい』を届けたい」という願いで、本日の受賞作品を一冊の作品集に収録します。

最後になりますが、御応募いただいた皆様、選考委員の皆様、応募に御協力いただいた学校関係者の皆様方の御健勝と、今後のますますの御活躍を御祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

【ごあいさつ】

「第6回久留島武彦童話賞く子ども創作童話コンクール」によせて

久留島武彦記念館 館長 金成妍^{キム ソンヨン}

今年も「第6回久留島武彦童話賞く子ども創作童話コンクール」にご応募いただいた皆様、ありがとうございます。そして、受賞者、ご家族、学校関係者の皆様、おめでとうございます。

令和6年(2024)は、久留島武彦生誕150年という節目の年です。50年前の昭和49年(1974)は久留島武彦生誕100年を記念して、東京の(財)日本青少年文化センターにより記念レコード制作事業が大々的に行われました。その時、多くの方のご尽力によってレーディングされた久留島先生の口演肉声は、現在、久留島武彦記念館の「久留島先生を学ぶ部屋」に設置されたタッチパネルで自由に聞くことが出来ます。久留島先生が亡くなる1年前である昭和34年(1959)に千葉県で語ったその声は、85歳とは思えないほど力強く、聞く人を引き付けます。

また、久留島武彦記念館の横にある国指定名勝旧久留島氏庭園には、日本初であり、日本一大きな童話

碑があります。久留島先生の童話活動50年を顕彰して建てられたものです。童話碑の除幕式が行われた昭和25年（1950）5月5日、久留島先生は童話碑の前に立ち、次のような言葉を述べられました。

「この童話碑は、玖珠町に生まれた私が、子どもたちに童話を語り始めた記念の一里塚です。

この地を起点にして、童話を書いたり話したりする人が、日本じゅうにたくさん出てきてほしいと願っております。」

久留島先生のこの思いを継承するために創設したのが「久留島武彦童話賞」です。このコンクールがきっかけとなって「童話を創ってみよう」と思い立ち、自分の中で一つの世界を創り上げ、それを表現するために原稿用紙に手書きで「書く」という行動を起こし、それを最後まで「書き切る」子どもが、今年も41名もいたことを、心から嬉しく思います。

毎年創作童話コンクールにチャレンジする子どもがいてくれれば、久留島武彦記念館としてはこれ以上嬉しいことはありません。

ご多忙にもかかわらず、コンクール実施に当たりご尽力いただきました皆様に心からお礼を申し上げます。来年も夢あふれる皆様の作品に会えることを楽しみにしております。

【ごあいさつ・選考講評】

絵本セラピスト

武岡 寿美
たけおか としみ

久留島武彦生誕150年 おめでとうございます。

そして、この記念すべき年に「第6回久留島武彦童話賞」子ども創作童話コンクール」において受賞されました14名のみなさん、おめでとうございます。

久留島先生の名言集の中に「言葉は自分の心を人の心にうつすもの」という言葉があります。

言葉を紡ぎ織り成して出来上った今回の作品は、まさしくみなさんの心を写し出しており、一人一人の想いが伝わり感動を覚えました。

今回の作品は冒険、ファンタジー、夢、教訓などが描かれており、全てにおいて想像力に優れ独創的で個性豊かな素晴らしい作品ばかりでした。

特にタイトルは作品の顔とも言われ、「読んでみたい！」と読者を惹きつける魅力的なものでした。自分の作品を是非、ご家族や学校のお友達に読んであげて下さい。”声に出して読む”ことで理解が深まり、頭の中で文章が明確になってきます。そして内容を正確に印象的に読むことによって語彙力や読解力も向上します。

また、リズムやテンポなどが身体に染み込んで、言葉の力、心の力となるでしょう。

見て聞いて体験して、心の中に広がる世界を自由に表現してみると、豊かな想像力とみずみずしい感性が引き出され、湧き上がる感覚はワクワクして楽しいものです。

みなさんに宿っている無限の可能性を信じて、これからも素晴らしい作品を創っていつて下さい。

「継続は力なり！」楽しみにしています。

小学生の部 大賞 『人間諸君、よく聞け』

名古屋港水族館で飼育されているシャチ（トム）の目線で見た人間観察。

シャチは凶暴で怖いという一面のほか、高い知能を持つ生き物だと言われています。その特徴がトムを通して、愛嬌たつぷりに親しみを抱かせてくれる心理、感情がユニークに描写され独創性、構成共に素晴らしい作品でした。相手の立場に立つて考えることや優しさ、思いやりなど周囲のことを良く観察しているトムはコミュニケーション能力にも優れていると思いました。

言い換えれば、人間も相手の表（姿）だけでなく裏（内面）をよく見て知って人間関係を築き上げることが大切だと教えられた作品でした。

最後の文章がタイトルの「人間諸君、よく聞け」を一層強調していて思わず「うまい！」と声を出しました。作者はきっと様々な観点で見たり考えたりすることができ、些細な気遣いのできる人かなと思いました。

水族館には水槽の表側だけでなく、裏側（バックヤード）もあります。面白いのは表側だけでなく、その裏側も”もっと面白いものがあるぞ”と想像を膨らませてくれた作品でした。

私も水族館に行ってみたくまりました！

小学生の部 佳作 『ゆめと王さま』

ねむれない王様のために、家来たちがあれこれと策を考えるという愉快な物語で、どうして王様はねむれないんだろ？と想像しながら先を読むのが楽しみでした。特に、会話と説明文のバランスが良く起承転結が上手く表現され、短い作品の中にも読者にとって自然に入ってくる文章と構成でした。

「そうだ、ピクニックだ！」に……なるほど！”と感心しました。前文で王様が忘れていたことを思い出させる心理的な発想表現には脱帽です。

この作品を劇にすると「りんご、おにぎり、ちようちよ、おちゃ」の3連続の”つぶやき”はきつと面白いものになると思いました。

また、物語の場面にイラストを載せたら、一冊の絵本ができあがりそうですね！

小学生の部 選考委員特別賞 『約束を信じて』

国と国との戦いの中、敵に捕らえられて牢屋に閉じ込められたルナ。

「信じて、絶対行くから」と約束したレオ。お互いに約束を信じ強い絆で結ばれた二人の物語ですね。

3年間ルナがレオを信じて待ち続けた心境が細かく表現され、とても臨場感がありました。

ルナが3年間牢屋の中にいた時、会えなかったレオはどこにいてどう思っていたのか？不安はなかったのでしょうか？

レオの心情なども書き足してみると、約束を信じた2人の想いがもっと強いものになると思いました。

約束を信じるということは相手への期待だけではなく、「約束！」と言葉にすることが自分への決意だったのかもしれないね。

小学生の部 読売新聞社賞 『化小学校二年、ももちゃん来たる！』

先ずは、小学生でこの長文を書けることに感心しました。

小学校2年生の春子ちゃんの所に、宇宙から地球に遠足に来たお化けの”ももちゃん”。

宇宙に帰れなくなったももちゃんが春子ちゃんと一緒に、宇宙の星に帰れる目印となる青い光を探しに行く物語ですね。

ももちゃんはお化け？…それとも宇宙人？（宇宙からきたお化けかもね）と楽しく想像しながら読みました。

家や学校、町での出来事など場面展開が良く表現されていました。

また、ももちゃんの顔が「丸っこいけむりみたいで、小さい星のような目、ごまつぶみみたいな鼻、じょうぎで線をひいたかんじの口」の描写が分かりやすく表現されていて、私も、ももちゃんの顔を描いてみました！

中学生の部 大賞 『人生日記』

中学生が書いたとは思えない「人生日記」に感動しました。

一年に一回、自分の誕生日に日記を書いた老人が、その日記を通して過去と現実を交差しながら自分と向き合い、記憶をたどる心情の描写が細かく表現され、まるでドラマを見ている様に映像化できました。

「日記をめくる手は母の温もりを探す赤子の手…」の比喻表現はイメージが深まり、優しく温かい気持ちになりました。

特に良かったのは、4歳の時は小さい時に戻った初々しい字で、63歳の時は震える字で書いているところだ。年齢によって文章の“字体”を視覚的に変化させているところに、その時の感情と時の流れを感じました。10代から40代までの日記も読んでみたかったです。

家族との思い出がいっぱい込められた日記は、懐かしい記憶の宝物。日記を書いてみたいと思わせる素晴らしい作品でした。

中学生の部 佳作 『羽に願いを』

絶滅危惧種に認定された日本翼狸奴（ニホンヨクリド）の研究記録を通して、夢と現実の狭間で悩み心が揺れ動く描写が上手く表現されていました。

生物の記録を通してヨクリドの特徴がきちんと分かりやすく整理、説明され本当に図鑑を観ているようにしました。

私が研究所の事務員であることが後付けになっているため、当初誰と話しているのか分かりませんでした。例えば、“この男―この研究所の責任者兼研究員：”“の文章の後に”そして私はここの事務員“と付け加えてみると、その後の2人の会話が成り立ち読者も理解できると思いました。

目の前のドアを開け一歩踏み出す勇氣と、ヨクリドを通して希望と幸福を願う思いが伝わってきました。

ヨクリドの羽がついた虹色のピアスは、きつとお守りだったのですね！

中学生の部 久留島武彦記念館館長特別賞 『ハンス』

お父さんがくじ引きで一等の旅行券が当たり、家族みんなでモンモン島へと船旅の途中、そこで出会った不思議な島「ハンス島」での探検物語ですね。

タイトルの「ハンス」って何だろう？と思いつつ読み進めて行くと、途中で「そういうことか！」と納得し、だんだんと異空間へ引き込まれていきました。

文中の会話の所が続けて書いてあるため、誰が話しているのか分かり辛い場面がありましたので、「」（かぎっこ）で改行してみると読みやすくなり、会話も弾むかと思いました。

それぞれに特徴がある動物や昆虫の名前の発想がユニークで、作者はとても想像力豊かな人だなと思いました。この旅の続きを読んでみたくなりました。

中学生の部 読売新聞社賞 『託されたもの』

冒頭の竜と麒麟が外科医のお医者さん……ここからすでに独創的な発想に驚きました。

手術道具の名称や手術の手順など細かく表現されている様子が写實的に伝わり、臨場感溢れる内容にドキキしながらドラマの様な物語に引き込まれました。

父親ロバン・チャールズと母親のこと、家族のことを物語の初めに少し紹介してみると、最後になぜ父親が母親（嫁）に殺されなければならなかったのか想像できたかとも思いました。

謎を含んだ発想がより読者の心を揺さぶり「どんな物語何だろう？」と思わせてくれる作品でした。

「託されたもの」は重くて尊いもの！命を大切にする優しさが伝わってきました。

高校生の部 大賞 『昆虫革命』

先ずは原稿用紙30枚の作品に驚きました！

冒頭の”花畑は特別“の説明は、花の色（視覚）、香り（臭覚）、甘い蜜（味覚）、柔らかな土（触覚）など感覚的描写が、迷い込んだ特別な花畑の世界を鮮やかに想像させてくれました。

また、ストーリー性もあり昆虫たちが描写された心理は緊張感に溢れ、独特の世界へ引き込まれました。

文中には、不安と安心（対義語）や「くのごとく」「くのような」の比喩も多く使われていて、読者に伝えようとする内容がより生き生きと表現されていました。

”燎原^{りやうげん}の火“など難しい漢字には丁寧^{ていねい}にふりがなを付けてあり読者への配慮を感じました。その他にも難しい熟語が使われていて物語全体がギョツと締まった作品になっていました。作品によっては対象者に応じて分かりやすく言い換えてみるのも良いかもしれませんね。

この革命はどうなるのだろうか？とドキドキ、スリル感を味わいながら、まるで短編小説を読んでいるようでした。

高校生の部 佳作 『人間のこと猫のこと』

作者は猫が大好きなんでしょうね！

猫のマロ目線で書かれた作品に私も猫の気持ちになって読みました。猫たちの会話を含め文章が読みやすくりズム感があり、しっかりした物語になっていると思いました。

猫は全身を使っていろいろな気持ちを伝えます。

例えば、興奮したり怒ったりしたときは毛が逆立ったり、甘える時は頭をスリスリしたり、あくび、爪とぎ、毛づくろい、鳴き声の変化など、猫の仕草や行動をもう少し表現してみると、人間から見た猫の気持ちをより理解できると思いました。

マロとネロの挨拶「ニャー（ネロ）」、「ニャー（よお、マロ）」の表現が愉快で作中でホッとさせられる場面でした。

高校生の部 佳作 『まほうのノート』

褒められるような凄いところが何もないと悩む小学一年生のフツの僕に、自分で自分を褒められるようにと、おばあちゃんが渡してくれた一冊の青いノート。おばあちゃんの優しさを感じました。

様々な観点から自分を見つめ褒める習慣を付けておくと、たとえ失敗や悪いことがあっても落ち込まずポジティブに捉えられ、自己肯定感を高めることができる”気づき“を教えてくれるような自己啓発文となる作品でした。

私も書いてみたくなりました。

ノート……何色にしよう？

高校生の部 選考委員特別賞 『大きな木』

大きな木とその周りに集まった草木、動物たちがお互いの足りないところを補い合いながら生活している様子が良く表現されていて、大きな木の優しさや生命力を感じました。

冒頭が”大きな木“の説明からでしたが、描写がぼんやりとして大ききのイメージがはつきりしませんでした。例えば書き出しを”ある秋の日……“から始め、その後大きな木の説明をする構成にしてみてもどうで

しょうか？

大きな木を見て話す三人の言葉に「腰を抜かした」「大きな木は神社の柱になる」「いい木だ」と描写しているの、読者もそこで大きな木の特徴が多少想像できると思いました。

大きな木はどんな神殿に生まれ変わったのでしょうか？

もしかしたら切られた切り株の脇から新しい芽が生まれたかも？と想像してみました。

高校生の部 久留島武彦記念館館長特別賞 『幸せのスパイス』

幸せの森の人気店のトトが作る料理で、闇の森を笑顔の森に変えた物語。

闇の森の王様や家来、村人を笑顔にした美味しい料理の中に入っている”幸せのスパイス”ってどんな香りなんだろう？と想像しながら読みました。

ムク王に料理を作ってあげている様子や準備した道具（フライパン、鍋、スプーン、お皿）とか、森の食材は木の実、山菜、きのこ、など細かく描写してみると出来上がりの「スペシャルポトフ」につながり、より一層美味しい料理のできあがり伝わってくると思いました。

また、帰りに貰った”果物”の形、大きさ、色、味などの特徴も表現してみると特別感が伝わり幸せのスパイスが強調されると思いました。

美味しい料理を作る”コツ”はやっぱり愛情ですね！

高校生の部 読売新聞社賞 『お空のお菓子屋さん』

お空のかけらを集めてお菓子を作ってくれるミミズクのおじいさんは、鳥たちの心を明るくし元気にしてくれます。

美味しそう！と想像しながら私も食べたくなりました。

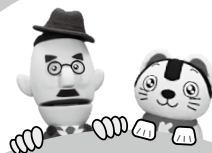
晴れた日にはスズメに、“青色のゼリー”を、曇りの日には白鳥に、“わたあめ”を、雨の日にはカラスに、“こんぺいとう”をと、お天気に合わせて選んでくれるお菓子の描写がとても美味しそうに表現されていました。

「どれどれ」のくり返しの文章が、これから何を作ろうか？と出来上がるのを楽しみに待つ時間も想像させてくれました。

ニコニコ、ふわふわ、キラキラなどのオノマトペがたくさん使われていることで、テンポ良くイメージしやすい物語でした。



【小学生の部】





【大賞】

人間諸君、よく聞け

大阪市立南大江小学校 4年

まちなか
町中 さくら

ここは名古屋港水族館。そして僕はシャチで、トムッて名前を付けられた。人間は僕たちのことを普段の生活を見せてシヨーをするだけで、なんの事件や事故もなくてうらやましいっていう人もいるけど、実際はけっこう大変なんだ。

まず、水族館が開園すると、入り口の近くにある僕たち、シャチの水そうに人間が来てじっとこちらを見ってくる。

「大きいなー、すごいなー。」

僕たちを見た人間はだいたいみんなそれしか言わない。ほめられるからうれしいような気がするけれど

やつぱりつまらない。人間が小さいだけなのに。小さいくせに、大きい僕らをこんな小さな水そうに閉じ込めて鑑賞するのも違うと思うし…。さらに、シヨーもけっこう大変だ。人間の指示に従うと食べ物をもらせるが、口の中に食べ物を入れられたしゅん間また他のことをやらされるから、かむひまもなく丸飲みしている。かといって、こんなに多くの人間が見ているから指示に従わないと、逆に後で气まずい。だって入場料で二千元ももらっているんだもの。さらに失敗したら恥をかくしプレッシャーもある。何かおゆうぎをやったら魚をくれるということは、シャチを魚でつって何かをやらせようと思っているのか、と僕たちの間で、うわさになっている。でも、何かをやらされるのも大変だ。なぜなら人間と言葉が通じないから、何をやらせようとしているのかも分からない時があって、そういう時はやってあげようと思うのに、やろうと思ったらできる時はやる気がしない。シャチって

不思議な生き物だ。まあ、結局やるけどね。

あ、もうすぐ開園だ。また、ちよつと嫌でちよつと疲れてほんのちよつぱり楽しい一日が始まるな。と思った直後にドアが開いて、続々と人間が入って来た。やつぱり、真つ先に僕がいる水そうにやってきて、「大きなー。すごいなー。」ばかり言っている。人間は、自分が僕のことを見ていると思っているけれど、僕だって人間のことを見て、観察している。それぞれ体のもようが違ふことや、そのもようがここで働いている人は全員同じことなどに気が付いた。見ているうちに、人間はどんな味なのかまで想像してみた。食べないけど、想像するだけなら何も事件にならないからね。でも、人間は自分が、自分が見ている生き物から見られて、観察されているなんて誰も思わないから、ありのままの人間を観察できる。それに関してはここにいるのも悪くないかもしれないと思う点だ。

まあ、そんなこんなしているうちに、シヨアの時間が

やってきた。これからシヨアプールに行くのだが、どうやってあのプールに行くのかは、たぶんこの職員は知られたくないと思うから企業秘密として伏せておくけど、近いからもう着いちゃった。あ、アナウンスの人がしやべり始めたからもう始まるな。そういえば、毎日アナウンスの人が違うな。疲れるから休んでいるのかな。僕は休めないのにいいな。なんて思っていたら僕担当の人間が指示を出してきた。そして、僕は左に三回ジャンプする。重い体を三回連続ジャンプするのは、ここに来てトレーニングを始めたばかりの時はまだ小さかったから朝つぱらからの練習はきつかったけれど、今は朝飯前だ。あまりにもよゆうな時は僕担当の人間の観察をする。僕の趣味は、人間観察だからひまな時やちよつとした時間に人間観察をする。人間はもようが一人一人違うので全然見飽きない。僕は、私はシャチに見られているからちゃんとしようとすると人間も見てみたい。でも、全然人間はシャチ

に見られているなんて思ってくれない。そこで、覚えておいてほしいことがある。それは、シャチの近くにいと必ずシャチに見られているということだ。そのことを忘れないで、シャチに見られているという緊張感を持って僕たちの近くに来てほしい。水族館に行くときはそれを忘れずに。特に、名古屋港水族館に行くときは。あなたのこと、一応信じてるよ。このことを知っているのに、忘れて僕のことを見たら、僕が人間の味を知ることになるかもしれないからね。



【佳作】

ゆめと王さま

玖珠町立 塚脇小学校 2年

たきいし ゆの
瀧石 佑乃

おかしむかしあるところに王さまが住んでいました。

王さまはなやみごとがあります。それは、夜にねむれないことです。

王さまがねると、ゆめの中でさまざまなこわいことがおきるからです。そのせいでなんども目をさましてしまいます。

ある日、ねぶそくてぐったりフラフラの王さまは、おしろの家らいたちをぜんいんあつめて、王さまのねぶそく会ぎをひらきました。

「王さま、ゆめのないようをわたしたちにくわしくせつめいしてください。」

家らいたちがいました。

「わかった。はなそつ。」

王さまは、ゆめのないようを家らいたちにはなしはじめました。

「一日目は、りんごのおばけのたいぐんがわしをどこまでもおいかけてくるのだ。それでとうとうりんごのなみにのみこまれてしまった。二日目は、きよ大な白いちようちよにわしはつれさらわれてしまった。三日目は、食べてもたべても食べおわらない大りようのおにぎりてわしのおなかはさけそうだ。四日目は、水とうからながれてたおちやのこう水がわしをどんどんしずめて今にもいきがとまりそうなのじゃ」

すると、あるけらいがいました。

「王さま。りんごのおばけと大りようのおにぎりは、二つともたべものです。」

べつの家らいがいました。

「しかし、ちようちよは、生き物ですよ。」

すると、だいじんもいました。

「おちやのこう水とは、どういうことだ。」

みんななやんでも答えがでません。

「このままでは、わしは、今夜もねおれないぞ。なんとかしてくれ。」

するとだまって聞いていたコックがたずねました。

「そういえば、王ひさまはきていないのですか。」

「それがさいきん、わしと口をきいてくれないのだ。どうもきげんがわるいらしい。」

「なやみごとがふえましたね。」

メイドがつぶやきました。

みんななやんでも答えが出ません。

すると、王ひさまとなかよしのメイドがいました。

「王さま。王ひさまとやくそくしていたピクニックは、いったのですか。」

すると王さまは答えました。

「ピクニック。なんのことだ。」

王さまは考えても思いだせません。

「それより、今は、わしのゆめのはなしを考えてくれ。」

みんなつぶやきながら考えています。

「りんご、おにぎり、ちようちよ、おちや…」

「りんご、おにぎり、ちようちよ、おちや…」

「りんご、おにぎり、ちようちよ、おちや、おうひさま

…」

だれかがつぶやきました。

すると、王さまは、さけびました。

「そうだ。ピクニックだ！」

「わしは、おべんとうと水とうをもつて、白いちようちよがたくさんとんでいるお花ばだけにピクニックに行くやくそくを王ひとしていたのだ！」

それをきいた家らいたちは

「それはたいへんですー王さますぐじゅんびして王ひさまと出かけてください。」

それから、王ひさまとなかなおりして、ピクニックに行つた王さまは、こわいゆめを見なくなったそうです。

【選考委員特別賞】

約束を信じて

由布市立由布川小学校 6年

後藤 愛莉
ごとう あいり

「ねえ、レオ。これからずっと一緒にいようね。」

「もちろん。ルナは俺が守るよ!」

果たされることがなくなった約束を思い出しながら、ルナは暗い牢屋の中で、くさりかけの食パンを食べていました。

小さいころからずっと一緒だった、騎士の一人息子レオ。ルナが牢屋に来てから、レオは会いに来ませんでした。「絶対行くから」と言ってくれていたレオは、うそつきだったのです。

ルナは、ムーン王国のプリンセスとして生まれました。幸せな国でした。争いなどはめつたになく、平和で、美しい国でした。でもルナが十二歳になったころ。

となりの国と他の国との戦いに、ルナの国の兵士が行くことになりました。ルナは何も心配いらないと思いつつものようにレナと遊んでいたのですが……………。

ドオン!

大きい大砲の音と一緒に、大勢の兵隊がルナの国に攻め込んできました。ルナの国の兵士はほとんどやられたのです。

それは戦争の始まりでした。ルナたちの王族は城から出られなくなり、ずっと兵士が三人程度ついていました。城下の子どもも城の地下に避難しましたが、間もなくつかまりました。ルナのお父さん、お母さんも大好きだったメイドのユカもつかまりました。

城の屋根裏、いつもレオと二人だけでかくれて遊んでいた場所にルナとレオだけ助かったのです。敵の兵士の足音が遠ざかるとルナとレオは変わり果てた城に驚きました。きれいに整頓されていた棚や大広間はぐちゃぐちゃに壊され、ルナの部屋にあった人形た

ちも壊されていました。残ったのはルナとレオの二人だけ。見つかるのも時間の問題です。

「レオ、どうしよう……………」

「ルナ、キミはわざと敵につかまるんだ。」

ルナの問いかけにレオは驚く答えを出しました。

「そんな格好じゃ王族ってわかるから、俺の服を貸すよ。ルナ、俺は絶対に会いに行く。だから俺のことを敵に言うな。味方など一人もいないと信じさせろ。」

レオは、ルナの頭に手を置きました。

ルナ、信じろ。

レオの目がそう語っています。ルナは決心しました。

「わかった。レオ、約束だよ。」

レオの言葉にルナは涙を流しながらうなずきました。物心ついた頃からとなりレオがいました。二つ年上のレオは、いつもルナの隣にいてくれました。そんなレオと離れ離れになってつかまるなんて、でも、レオなら信じられます。

ルナはレオの服に着替え、わざと敵につかまりました。兵士に連れて行かれる前、レオと別れた城の門を振り返ってみると、もうそこにはレオの姿はありませんでした。

あれから三年。未だに戦争は続いています。ルナは一人、地下の牢屋に閉じ込められていました。鎖でつながれ、動くこともできません。一日二回、くさりかけの食パンが運ばれてくるのを待つ生活にも慣れました。お父さんとお母さんは無事なのでしょうか？レオはどうなったのでしょうか？

考えれば考えるほどルナは泣きたくなくなりました。傷んだ髪の毛をさわっては、何も考えずにぼーっとする。ただ、それだけを繰り返していました。泣きたいときもありましたが、レオを信じて待ち続けました。

そして、ある日の食事の時間。いつもとは違う高貴な服を着た男の人が食事を持ってやってきました。

その男の人の顔にどこか見覚えがあります。ルナは

目を見開き、叫びました。

「レオー」

ルナは鎖が伸びる限り、鉄格子に近づきました。

「レオーレオでしよう。」

ルナが必死に呼びかけても男の人は反応しませんでした。金髪に、青い瞳、凜とした顔立ち。三年前に別れたレオに違いありません。

でも、男の人が口を開いたとき、ルナは体の力が抜けていくのを感じました。

「お前なんて知らない。そんな身分で俺に話しかけるな。お前の処刑が決まったからわざわざ出向いてやっているというのに。」

男の人はレオではありませんでした。冷たい瞳でルナをにらみつけてきます。ルナは口の中がカラカラになり、声が出ませんでした。

「処刑は明日の日の出の刻だ。覚えておくように。」

男の人はそう言って地下牢にカギをかけ、行つてし

まいしました。

男の人はレオじゃなかった。明日には私は殺される。信じて待った三年間は無意味だった。

ルナはどうでもよくなり、なにも考えられませんでした。自然とほおを涙が伝います。ルナは奥歯をギュツと噛みしめました。

次の日の早朝。ルナの鎖が三年ぶりに外され、騎士三人と処刑台に歩かされました。息がうまくできず、生きている心地がしませんでした。ルナの命もここまです。お父さんとお母さん、ユカはもう死んでしまったのでしょうか？

「もうすぐ私もそっちに行くよ。」

ルナはそう思うと苦しくなってきました。

大丈夫。ここを過ぎればみんなに会える。死んでしまった騎士たちにも家族にも。

ルナは輪っかのような縄の前に立ちました。縄をにぎり、覚悟はできました。

「これより処刑を開始する！」

ドラが叩かれ、ルナは大勢の人の前に立ち、縄を首にかけようとし……………。

「ルナ！」

ふいに名前が呼ばれました。

ああ、天国のみんなの声だ。やっと会える……………。

「ルナ！」

すると、今度ははつきりと聞こえました。今ここで、現実で、ルナの名前を呼んでいる人がいます。ルナの手が止まりました。

そのとき。

「……………ルナ」

ルナの体が抱きかかえられ、耳元で声がありました。

「いやっー放して！私はみんなに会いに行くんだ！」

パニックになったルナは暴れました。誰かの腕から離れようと必死でもがきます。でも離れることは出来ませんでした。

「ルナ、落ち着け。」

耳元でそう言われて、ルナの目から涙があふれました。至近距離に男の人に顔があります。

金髪で深い青色の瞳。白い肌。

昨日の貴族です。でも、貴公子のような上品さは消え、ルナが知っている顔になっていました。

ルナがずっと会いたかった、待ち続けた人。信じて、待ち続けて……………。

「レオ……………」

目から涙があふれてきます。ルナはレオに抱き着きました。

「やっとここまで来たよ。ごめん、遅れて。」

レオはそう言い、ルナを抱く手に力を込めました。

「ずっと待っていた……………！レオ……………」

ルナが泣きながらレオの顔を見るとレオはルナの口びるに、そっとキスをしました。

【読売新聞社賞】

化小学校二年、ももちゃん来たる！

聖徳学園小学校 4年

諸井 理杏
もういりあん

こんにちは、私、山崎春子。小学二年生。今はお留守番中。たしか、お母さんは五時くらいに帰ってくるんだよね。ようし、それじゃ、お姉さんらしくがんばろうつと……、けど、怖いなあ。五時はもう暗いし、今は冬だから寒いし……。ああ、私どうすればいいんだろう。そんなことを考えていた、その時だった。

ふわあ。

なんと、私の目の前の机が空中にういた！

「きゃああああ。」

私は思わず悲鳴をあげた。

「おどろかせちゃって、ごめん。やっぱり、お化けらしい

登場がいいかと思って。机は、あたしが持ち上げたの。」
「え？」

私は顔を上げた。そこには、丸っこい煙みたいで、小さい星のような目、ゴマつぶみたいな鼻、じょうぎで線を引いたかんじの口がある。へんなやつがいた。おそろおそろ私は聞いた。

「あなたは……、だれ？」

へんなやつはニコツと笑った。

「わたし、化小学校二年生、もも。おばけだよ。ちよつと迷子になっちゃってさ……。てへへ。」

へえって私は思った。背は私の半分くらいだけど、同級生だとは！だから私もニコツと笑って言った。

「こんにちは、ももちゃん。私も小学二年生で、春子っていうんだ。よろしくね。おばけの友だちなんて、わくわくするなあ。どこに住んでいるの？」

するとももちゃんは口がさけるんじゃないかっていうくらいがばって口を開いて笑った。

「ありがと。みんな、人間の子たちは、あたしを怖がって…。あたしは、地球には住んでいない。地球からすごい遠いエペレン星っていう星に住んでる。あたしの星は、地球よりもすごいんだよ。小学校二年生の遠足が、宇宙探検なんだよ！だから、自由行動のとき、わたし地球に来てみたんだよ。けど、どこから出ればいいのか、分かんなくて…。」

「そっか…。じゃあ」

すると、私の言葉を誰かがさえぎった。

「春子！誰としゃべっているのよ！もう、大丈夫？なぜかしら…。」

「お、お母さん！」

もう帰ってきたんだ。私はあわててももちゃんを背中にかくした。すると…。お母さんがこっちにつかつかと歩いてきた！もう、だめ…。ももちゃんごめん…。でも、意外にもお母さんの反応は違った。

「何かかくしているの？でも、何もないわね。春子、本

当に大丈夫？」

え？お母さんにはももちゃんが見えないの？

「もう…。ゆっくり休みなさいよ。夕ご飯作ってるからね。」

そう言うとお母さんは行っちゃった。すると、ももちゃんが後ろから飛び出してきた。

「あたしの指定した人以外は、あたしの姿も声も見たり聞いたりできないんだ。で、じゃあ、何？」

「すごいね。あと、明日学校行くから、来てみたら何か見つかるかもよ？」

「うん、行ってみる！」

翌日

「行ってきたあす！」

私はももちゃんと家を出た。お母さんにはなんやかんや言っでごまかしてね。

はあ…。私の家から学校、遠いんだよな…。ももちゃんのためと学校で遊ぶためとはいえ、いつもだけど、

めんどくさいな…。

「じゃあ、あたしがいいことしてあげる!」

え? ももちゃんって、人の心も読めるんだ!

「いいことって、何?」

するとももちゃんは得意げに言った。

「こーそくいどーまほーだよ。ピヨツツエ。ピヨツツエ、あたし、人間界でも、春子ちゃんの学校行きたい!」

そのとたん。

風が吹いて私の体が空中にういた。私が思わず目をつぶると、何か足にかたいものが。

「ここ、学校のろうか?」

そう、長くて茶色のろうか。しかも私のクラス二年

三組の!

「ありがとつ、ももちゃん」

私がそう言うのと、クラスから先生の声が聞えてきた。

「山崎春子さーん。」

うわ、やばっ!

「は、はい。」

先生は、入ってきた私をギロリ。

「山崎さん、あなた、これで四回目ですよ。今度おくられてくるようなことがあったら、おうちに連絡しますよ!」

「す、すみません。」

私は急いで席に着いた。うそ。ももちゃんがこーそくいどーまほーをかけてくれたのに!すると、ももちゃん、気まずそうに私を見てきて、ぼつり。

「ごめん。いどーまほーはいどーまほーでも、ゆったりいどーまほーをかけちゃった。」

なんてすとーでも、まあ、いっか。

一時限目は体育。私はももちゃんを連れて、体育館へ向かった。向かうと中、私はこっそりももちゃんに聞いた。

「ねえ、エペレン星へ帰れる目印みたいなもの、ないの?」

するととももちゃんはいかない顔で答えた。

「あるよ。青い光。それだけだけど…。」

「そっか…」

一カ月後

ない、ない、ない、ない！青い光なんて、ぜんっぜんない！まだ寒さは続くし、家の中でまったりしたいんだけど…ももちゃんが…。そう、月日が経つうちにだんだん元気がなくなっちゃって、理由を聞いたら家族が恋しいんだって。まあ、そうだよな。おばけでも私と同じ二年生。だから、早く青い光を見つけて、帰してあげないと。信号機、水槽の光、充電中のカメラとか色々あるんだけど、どれも違うんだって。

「はあ…。」

ため息をつきながら、私かももちゃんと町を歩いていた。その時！

「まてえー。ドロボウー！」

おじいさんの大声が聞こえた。つかまえなきゃ！と私は思った。ももちゃんも

「うん。」

と首？をたてにふる。ももちゃんが言う。

「ビヨツツエ。ビヨツツエ、あたしをドロボウのところへ連れてって！」

びゅーん。

私の体が風をきる。あ、もうドロボウの背中が見える！

ドンツ！

私とももちゃん、ドロボウに体当たり。でもドロボウはまた走り出す。私はドロボウになんとかしがみついて、大声で言う。

「とつたもの、出さないよっ！」

ふり向いたドロボウ、めっちゃあせり顔。

「うげっ、ゆ、許してくれ…。」

ドロボウはそう言って何かを差し出した。

「これ、盗んだ、サファイア…。」

私がそれを見ると、まばゆいばかりに光るサファイ

ア。それは、間違いなく青い光を出していた。

「これだ…。ついに…見つけた！」

ももちゃんがつぶやく。

「え、やったあーっ！」

私は、喜びながらも複雑な気持ち。周りの人たちが不思議そうに私を見る。けど、そんなこと、どうでもいい。ついにももちゃんが帰れるんだから。ももちゃんは、しばらく出すように言った。目に涙がたまっていた。

「あたしが…呪文を唱えれば、すぐにエレペン星に帰れる。春子ちゃん、ありがと。ずっとずっと忘れない。ずっと…。」

ももちゃん、泣く。私も、泣く。

「いいの、ももちゃん、帰って。ありがと。楽しかった。こっちも、ずっと忘れないよ。」

すると、ももちゃんは泣きながら呪文を唱える。

「ビヨツツエ、ヒクツ、ビヨツツエ…。春子ちゃん、あ、あたし、ぜったい人間界にもどってくる。それまで、待って

て…。エレペン星に帰ります…。」

ももちゃんは消えちゃった。けど、ずっと忘れないよ。ももちゃん。

二十年後

「もも、そっち、どう？ 私は仕事でいそがしいー。」

「うっそー。春子も？ こっちもおー。」

今は、ももと近くのカフェで話し中。ももはおばけだけど、たまに人間界に来て、働く。だから月に一回くらいは二人で話し合う。

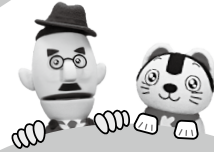
「あ、やばっ。春子ごめん。そろそろ行くわー。また今度ね。」

ももは出口に向かって歩いていく。その後ろ姿を見ながら、私は思った。

これからの未来は、人間とおばけだって自由に行き来できたり、一緒に住めるような世界になるのかもね。



【中学生の部】





【大賞】

人生日記

玖珠町立くす星翔中学校 3年

もうり
毛利 太河

これから私は自分の人生を振り返ろうと思う。

私には幼い頃から毎年誕生日に記してきた日記がある。歳が六十を超えた今でも書き続けている年季の入った日記だ。年に一度だけ書くのなら「年記」と呼ぶべきか、まあ誕生「日」に書いているなら「日記」でも良いだろう。

「それでは見ようか。」

私はそう呟き、おもむろに黄ばんだ日記の表紙をめくった。

「よんさい、きよつはおとうさんからにつきをもらいました。おとうさんが「このつきはだいじにつかってほしい。」と書いていたので、つきはらいねんのたんじ

ようびにかこうとおもいます。」

この日記を貰ったのは4歳の時だったか。初々しい字だ、我ながら愛くるしい。そういえばこの年の誕生日は母が手作りのケーキを出してくれた気がする。普段は料理も作らないのに、この日だけは妙に張り切つて父の手ほどきを受けながら苺を切っていたな。しかも、ろうそくまで作りだして結局粘土をこねくり回したようなものが出来た、それがケーキの上に乗らないからと最終的にキャンドルみたく使ったな。あのときの緑のろうそくは家族皆で爆笑したことを覚えてる。いや、青のろうそくだっただろうか。まあ、細かいことはいいか、あの日は本当に楽しかった。

さて、次を見よう。

「ごさい、きよつはおとうさんとおかさんとお花みにいきました。さくらの木がいっぱいあって、すごくきれいでした。お花みのかえりにおとうさんがお花やさんでマリーゴールドをかって、おかあさんにあげ

ていました。さくらをみにいったのでさくらをあげたらしいのになともいました。」

この年はお花見に行つたのか。うつすらと、お花見から帰るときの車の中で見た水平線とそれに沿う砂浜を覚えてゐる。もうそれ以外は覚えていない。もっとも重要であつただろう家族と一緒に見た桜の木を思い出せなくなつてしまつて心が痛い、家族と過ごしたという事実が日記という形で確かにここにある。今では父も母もいないがこの日記が私と家族の唯一の繋がりであつてほしいと思う。やはり恋しい、家族というものが。

早く日記を見たい。家族との記憶を追つていたい。私の日記のページをめくる手は、母のぬくもりを探す赤子の小さく、虚弱な手のように小刻みに震えていた。

「六歳では何を書いた。」

幼き自分が書いた字をここまで酷く求めたのは生

れて初めてだろう。

「6さい、ことしのたんじょう日はおとうさんと2人ですこしました。おかあさんは2しゅうかんくらいまあからいえにかえつてきていません。おとうさんにきいたらおとうさんが、『おかあさんはかなり大きいびょうきでじつはにゅういんしているんだよ。』とおしえてくれました。ことしのたんじょう日はいつものたんじょう日よりすこしさみしかったです。」

「嘘だろ。」

と思わず声が出た。母が入院していたことはもちろんだが、それと同時に、これほど重大な事を覚えていない自分に驚いた。というより嫌気がさした。本当に自分が家族を愛していたのか疑わしく思った。まるで別人のようだ。吐き気がする。

それより、なぜ母も父も入院するということをやめ私に教えてくれなかったのだろうか。それが凄く気がかりだ。

ここから先の日記は、母の存在が一つもなかった。つまりもう母が入院して早い段階で亡くなっていたのではないかと思う。父は私に「お母さんが亡くなった。」など、一つも言っていないかった。なぜ黙っていたのか、なぜ何も報告しなかったのか。そんなことばかりが私の頭を埋め尽くし、それから日記を読んでいてもあまり頭に入らなかった。しかし、あるページで自分の目が完全に覚める感じがした。

「五十四歳、一昨日父が死んだ。死因は老衰だった。私が幼い頃から良くも悪くも優しく育ててくれた。怒られることなんて滅多に無かった。私は立派に育っているだろうか。最近は忙しい日々が続き、顔を見合わせることも少ないのにいきなり亡くなってしまから、ひっくり返る程驚いた。最後にまた一度、酒でも飲み交わしたかったな。父さんに話したい愚痴とか沢山あったんだけどな。昔から自分の話はしなかった方とは言え、きついとか苦しいとかはちゃんと言っ

て欲しかった。体調悪い時はいつでも言ってる、いつでも介抱するからねって言ったのにな。今でも少し一緒に遊びたいと思う。多分、体にガタが来てキヤッチボールすらままならないと思うけど。父さん、天国では饒舌になっていくれよ。」

父は、死んだのか。私が五十四歳の時に。全く記憶がない。一番私に寄り添って、最も愛をくれた人の死を覚えていない。もはや悲しいなどの浅はかな言葉を出すことすらできなくなった。絶望だった。今や父と母の私の誕生日を祝ってくれる声も思い出せない。私は最低だ。

「五十八歳、最近は花に風情を感じるようになった。庭にマリーゴールドを植えて、元気に育つように水をあげていると何だか自分に元気が湧いてくる。マリーゴールドの花言葉は「変わらぬ愛」らしい。もう随分昔の事だが、五歳の時の誕生日に家族三人でお花見に行った帰り道、父さんが母さんにマリーゴールドを

渡していたが、そういう意味だったのか。昔、母さんがマリーゴールドを好きだと言っていたことを思い出して買ったが、やはり父さんは母さんが大好きだったんだな。」

今の私はもうこんな近頃の事も覚えていない。というより、直近の事程覚えられていないと言うべきか。始めにこの日記を読み返した幼い時の記憶の方が最近の事より覚えられている。いくら歳とは言え、明らかにおかしいものだ。

「六十歳、最近、物わすれがひどくなってきた。そろそろ私もボケ始めていると思ひ、病院へ行ったのだが、医者から若年性アルツハイマーと診断された。想像しているより症状が進行しているらしく、近々入院することになった。これから入院の準備も始めようと思う。」

ああ、そうか。日記に夢中になって忘れていたが、私は今病室にいるんだ。若年性アルツハイマーで入院し

ていたんだ。道理で過去を覚えていられない訳だ。原因が病氣と言えど、思い出せないのは息が詰まるような、身を縛られるような感じがして苦しい。苦しいからこそ助けを求めるように、現実から目をそらすように、過去の自分が書いていた日記に逃げたんだろう。本当は受け入れたくなかった。日に日に記憶が薄れゆくのが怖かったから。私の中から家族が消えるのが恐ろしかったから。

気が付けば時計の短針は物静かに午前0時を指していた。そういえば今日は私の誕生日だ。この日だけは覚えている、私の人生を唯一証明できる日だからだ。

「これを書いたらもう寝よう。」

「六十三さい、きょうは、昨日と続けて日記をよんだ。につきを読んで思ったことは、また父さんと母さんに会いたいという事だ。もしまたあえるなら、その時はありがとうと伝えたい。」

やはり思ったように手が動かない。字を書く手が震えて書いた字一つ一つが曲がってしまう。一文を書くだけでも精一杯だ。

「それでは寝よう。」

そう呟きながら何の気なしに日記の一番最後のページを開いた。そこには懐かしい字で何か書いてあった。

「今までではおやらしい事できなくてごめんね。料理も全然できないけど、あなたのためにケーキを作ったりしたね。でもぜんぜんできなくて多分がっかりしちゃったよね。一緒にあそんだりもできないままお母さんは入いんすることになったよ。もっとあなたと色んなおもい出作リたかった。私は本当にあなたを愛しているわ。これからはおとうさんと幸せにげんきに暮らしてね。」

母さんの字だ。衝撃で開いた口が塞がらない。母さんの字をまた見るなんて、頬に涙が伝うのを感じ

た。全身に鳥肌が立つ。

「母さん。」

思わず声が漏れた。もう覚えていないはずの母の聲が聞えた気がした。深夜の病室に私の鳴咽が響く、その様を午前0時を指す時計だけが眺めていた。

母の文の隣にもう一つ何か書かれている。

「この日記をお前に渡したのには実は理由があるんだ。その理由というのは母さんの事なんだが、母さんは若年性アルツハイマーと言って脳がだんだん委縮していつてしまう病気なんだ。母さんはお前を産んでもうすぐにこの病気になって、近々入院するだろうって話があったんだ。そして、この病気は遺伝してしまうケースがあるらしい。そして方が一、お前にこの病気が遺伝して、お前の脳の正常な働きができなくなってしまうも、お前の人生を代わりに覚えてくれる、人生の日記をお前に持っていてもらいたかったんだ。それともう一つ、俺は母さんに、母さんの病気

のことと入院することをお前に言わないでくれと頼まれているんだ。母さんはこの話を墓場まで持っていてこうとしていたらしいが、俺はお前の親だ。このことはお前に言うておく責任がある。母さんは俺に言っていた。「私はこの子のために母親を全うできない。だからこの子に心配されるようなことはあっちゃいけない。」って。俺は言った方が良かったが、母さんは全く譲らなかった。でも俺はやはりお前に伝えた方が良くと思ったからここにこうして書いている。最後に、俺も母さんもお前の事が大好きだ。元気に立派に育ってくれ。」

全て読み終わる頃にはもう涙で前が見えなかった。私がどれ程愛されていたか、もう計り知れない。私は本当に幸せ者だ。これだけ溢れんばかりの深い愛情をずっとずっと受けていた。私も父さんと母さんの事が大好きだ。こんなに幸せで、素晴らしい人生があるだろうか。

ああ、もう一度父さんと母さんの顔が見たい。会いたい。笑い合いたい。またもう一度会えたなら、「ありがとう。」

と伝えたい。

後日、とある病院の病室で一人の老人が亡くなっていた。その遺体は、一冊の日記を抱きかかえて微笑みながら目を瞑っていた。



【佳作】

羽に願いを

玖珠町立くす星翔中学校 2年

あきよし あやね
秋好 彩音

【これは、絶滅危惧種に認定されたある生物についての記録である。江戸時代後期に現れ、日本人の生活に度々関ってきた生物だ。我々の研究所では、長年この生物についての研究をしている。】

手渡された、見るからに製作途中な手書きの資料（資料というより、メモに近いような気もする）は、そんな文章から始まっていた。思わず、目の前にいる男を困惑の表情で見つめる。男は少し間を開け、口を開いたかと思えば、

「……まあまあ、そんなに硬い顔をするな。今日は特別に、この記録の”一部“をお見せしようではないか。」

なんて偉そうに言葉を並べた。正直、言っている意味が分からない。いきなり呼び戻された理由も、この記録を読まされる理由も。

「ほら、はやく続きを読め。お前も忙しいんだろ？」

ただ一つ、確かなことがあるとするならば、この男——この研究所の責任者兼研究員が、とてつもなくマイペースだということ。反論は意味を成さないようだ。

【その生物の名前は「ニホンヨクリド」（日本翼狸奴）。学名は「Japanese wing cat」。ヨクは翼という意味で、狸奴は猫。文字通り、背に翼が生えた猫である。

生息地は、空気と水質の良い水辺。主に水草やタンポポ、魚を食べて暮らしている。（写真1、2参照）

何と言っても、最大の特徴はその翼。ニホンヨクリドの翼の色は主に4つある。

まずはオレンジ色。夏の夕日を溶かしたような、胸が熱くなる色だ。次は青色。美しく澄んだ、冬の青色

を溶かしたような色だ。その次は灰色。心が落ち着く、秋の曇り空のような色。（写真3, 4, 5参照）

もともと絶滅危惧種というのもあり、あまり数がないニホンヨクリド。その中でも特に珍しい色がある。それが「虹色」である。春の雨上がりの空にかかる、鮮やかで儚い虹のような色。全体のたった7%しかない、七色の翼を持つニホンヨクリド。昔から縁起が良いと言われており、虹色が住み着いた水辺の魚は高価で取り引きされている。（写真6、資料1参照）

「…へえ」

「間拔けた感想だな。」

笑を含みながら馬鹿にされた。何だこいつ。

「うまくまとめられているだろう？」

「…まあ、そうですね。言い回しがくどくて分かりにくいですけど、実際の写真と照らし合わせるとしっくりきます。」

「フフ、そうだろう？」

が、二言ほど余計だな、とわざとらしく眉を寄せているのには気づかないふりをして、次のページをめくった。

【すごいのは翼の色だけではない。ニホンヨクリドはもう一つの大きな特徴がある。何と天候を操れるのだ！オレンジ色の翼を持つものは晴れ、青色は雨、灰色は雪を呼び寄せることができる（資料2参照）】

「虹色は？」

「次の文を読んで見ろ。」

【この3種類は確認されているのだが…。唯一、虹色の翼を持つものが操ることができる天候は明らかにない。理由としてあげられるのは、そもそも翼狸奴が天候を変えられることが殆どない、という

こと。ほとんどの個体は、その力を使う前に死んでしまふ。他の3つが明らかになるまでにも、莫大な時間がかかっているのだ。

虹色の翼を持つ個体は希少、というのも理由の一つだろう。】

「無難に虹とかじゃないんですか？」

「お、鋭いな。オレもそう睨んでいるが……。なにせ記録として残っていないからな。」

「ふーん……。」

自分で言っておいてあれだが、虹は天候に分類されるのだろうか。

【今、我々の研究所ではこの特徴を活かすことができる何かがないかを模索している。

無難なもので言うと、ニホンヨクリドを養殖し、俗にいう「お天気屋」のような商売をすることだろう。

だが、これにはいくつかの欠点がある。

まず、養殖することが非常に困難であるということ。ニホンヨクリドは繊細な性格をしており、少しの環境の変化にも大きく反応する。元々の住処から人工の水辺へ移行させるとなると、最悪の場合、多数の犠牲が出てしまう可能性があるのだ。

次に、この様な商売を動物愛護団体が許すはずがないということ。ニホンヨクリドにとっては、「天候を呼び寄せる＝死」なのだ。】

「ここについての説明がもう少し欲しいですね。」

「む、どこだ？」

「この“天候を呼び寄せる＝死”のことですよ。」

「あー……そこはまだまとめ終わってなくてな。」

なぜ部外者のわたしが、未完成のものを読まされているのだろうか。疑問が振り出しに戻りそうになるが、この疑問は、もう一度頭の隅に追いやることに

する。

「あと、”許すはずがない”っていう言い回しは少しおかしいかもしれませんね。実際に聞いたわけでもないのに、決めつけているような印象になります。言い換えるのをすすめますね。あと、翼狸奴の呼び方も統一した方が良さそうです」

「おお、いきなりの饒舌……」

あつ、と思うがもう遅い。いつも部下にするようなアドバイスをしてしまった。相手は曲がりなりにも上司。別にいいような気もしないでもないが、ここは謝るべきだろうか。

「……すみません。」

「別に謝ることはない。と言うか、そういうアドバイスがほしくて読んでもらってるからな。じゃんじゃん言ってくれ！」

「え、そんな理由で読まされてるんですか。」

「な、そんなって何だ！……まあ、他にもあるが……」

語尾を濁すと、ふっと視線をそらす。

「ハッキリしない人はモテませんよ。」

はあっ!? と間抜けた叫び声を出し、耳まで真っ赤に染めて喚く上司を見て見ぬふりをして続きを読むことにする。

……つもりだったが、次のページは白紙だった。

「え、ここで終わりなんですか。」

「はじめに言っただろう? 『製作途中』だど。」

「……どうして部外者のわたしが、”製作途中”の資料を読まされてるんですか。わたし事務員なんですけど……」

「まだわかってないのか!？」

大袈裟にため息をついて、やれやれと言わんばかりに首を振る。完全に自分に酔っているようである。

「オレは、お前が某有名私立大卒なのも、一度一般企業に就職したもののどうしても研究員になりたくて3年で辞めたのも、元は研究員になるつもりでここ

を訪れたのも、研究にかかる労力に見合った報酬をもらえないことに気付いて事務員になったことも知っている。」

「はっ!？」

悔しいことにすべての中である。

確かにわたしは、全国的に有名な大学を出ている。そこで研究の楽しさを知り、諦めきれずに一度就職した会社を辞めてしまった。

日本翼狸奴の研究に携わりたいと思いこの研究所を選んだのだが、先ほど言い当てられた通り、給与が私を悩ませていたのである。わたしだって、曲りなりにも20代の若者。かわいい服やコスメが欲しいし、休日にはおしゃれなカフェにだって行きたい。が、研究に時間がとられ、それに見合った報酬がもらえないとなると、いろいろな考えなおす必要がある。

ここが私設研究所で、ここ最近はまだいい結果が出ていないこともわかっていた。やはり研究員になる

のは諦めよう。そう思った時、目に飛び込んできた”事務員募集“の貼紙。研究こそできないが、研究所に携われることはできる。それに、事務員なら仕事に時間を取られすぎることはないだろうし、それならこの報酬で満足できる(と思っていた)。事務員として研究がどんなふうなのかを観察して、考えが変われば研究員になればいい。事務員ならバイトもできそう
だ。

そうして夢を膨らませたわたしは、昨年からは晴れて事務員になったというわけである。

「…だから何ですか。」

「…。」

ぐうん、と咳払いをしたかと思えば、なんと頭を下げてきた。

「えっ、ちよっとー。」

「頼むっ！研究員として、一緒に働いてくれないかっ!？」

差し出された右手に困惑してしまう。何を言いたすのだ。

「文武両道！頭もいいし作業効率もいい！体力もある！そして何より、翼狸奴に興味がある！こんな優秀な人材を事務員なんかとして雇うのはもったいないが過ぎる！」

事務員”なんか“は失礼すぎないか？

「頼む……！研究員は年中無休で人手不足なんだ……！」

「えつ、えつと……。いきなりそんなこと言われても……。なんて言いつつ、わたしの左手は動きそうになっているのだから不思議だ。」

”給与がわたしを悩ませている“でも、今のわたしには本当にそうだとは思えない。何か理由をつけて逃げただけなのではないだろうか。新しい場所に飛び込むのが怖いだけじゃないだろうか。

「……わかりました。」

「えつ？」

腰を曲げたまま、首だけがこちらを向く。ふつうに痛そう。

「元の体勢に戻って下さいよ。」

「あ、ああすまん！」

「研究の手助けになるのなら、こんなわたしでいいなら。その話、受けます。……いや、受けさせてください。」

「……ほつ。」

大きく息を吸い込んで

「ほんとうか……！」

目をうるうるさせながら、大袈裟に驚かれた。

「歓迎するぞ！大歓迎だ！」

「あの、こんなにサクツ決めちゃっていいんですか……？」

「おつとそうだな……。うむ、とりあえず面接だけやっておくか。」

採用は確実だから形だけな！と付け加えると、こちらに背を向ける。

「面接は食堂で行おう。さあ！ついてくるんだツッ！」

「えっ今からですか!？」

わたしの声は届かなかったようで、180センチの大男は食堂に向かって駆け出した。

事務の仕事はまだ終わっていないのに、というか、事務室の方も人手不足なんだが、

「…もう、」

抱えていた資料をぎゅっと抱きしめ、まっすぐにローカの先を見据える。

「はやくこーい」

と手を振る姿は、やっぱりマイペース。

「…今行きますよ。」

わたしの胸の中でカサカサと揺れる紙束の端っこには、こんなことが記されていた。

【翼狸奴の羽は、古くから幸福を呼び寄せると言われている。】

わたしにとっての幸せは、自分のやりたい職にすること。

わたしの耳元で揺れるピアスについた虹色の羽が、まさか翼狸奴の羽だなんて。あの上司はいつ気づくだろうか。

窓の外に広がる空は、わたしの門出を祝うかのよう
に虹がかかっていた。

【久留島武彦記念館館長特別賞】

ハンス

角川ドワンゴ学園N中等部 3年

来た
田 倫太郎

「おーい！大変だー！」

ある夜、仕事から帰ってきた僕のお父さんが玄関に飛び込むように入ってきた。びっくりしたお母さんが「あなた 一体どうしたの？」

と尋ねると、

「帰りに福引をやってみたんだが、見てみろ！」

お父さんはそう言ってお母さんに何かを見せた。

「まあ！すごいじゃないのお父さん。」

お母さんはさっきよりも大きな声で言った。

僕は気になって二人の所に駆け寄り、お父さんが手にしているものを覗いてみた。それは何と、一等の旅行券だった。行き先は『モンモン島』という、田舎気分

が味わえる島だ。

「やったねお父さん。」

「ああ。それでなそれでな、ちょうど今週の土曜日から連休だし、思い切って土曜日からモンモン島に行ってみないか。」

「やったー！久しぶりの旅行だー！」

僕はその夜疲れ果てるまではしゃいだ。

そして土曜日になり、僕たちの旅が始まった。お父さんの運転する車で港まで行き、そこから船で島に向かうらしい。案内人である船長に乘せてもらい、モンモン島へと出航した。カモメの鳴き声と波の音、そしてわずかなモーター音。僕はその音を聞きながら、船からの景色を眺めているうちにいつの間にか全身で海を感じていた。海中には魚もたくさん泳いでいるようだったが、海面が日光で反射されているせいでよく見えなかった。それから一時間以上がたった頃。「なんだか霧が深くなってきたわね。」

お母さんが手で霧を払いながら言った。確かに気がつくといりは真つ白になっていた。Ｔシャツが少し湿っている気もした。

「あまり前が見えないけど大丈夫ですか？」

僕は船長に話しかけた。

「このままじゃ前どころか近くの海面すら見えなくなりそうで危険かもしれない。レーダーが近くの島に反応しているから、そこにいったん上陸して霧が晴れるのを待とう。」

船長がそう言って舵を切った。僕はちゃんと目的地につけるか心配になった。そんな僕の様子に気付いたお母さんが

「大丈夫よ。霧が晴れたらすぐ行けるわよ。」

と励ましてくれた。

そうして近くの島に上陸した僕たちは、少し休憩することにした。僕は辺りを見回してみた。周りは木や草が生い茂っていて、先へ進むのが難しそうだった。

た。そこでふと横を見ると、そこには木製のボロボロな看板があった。看板にはうっすらと『ハンス島』と書かれていた。

「聞いたことのない島だな。」

と僕が首を傾げていると、

「あなた誰？」

茂みから声がしたと同時に、一人の女の子が出てきた。

「わーびつくりした。君こそ誰？」

「私はこの島の管理人をしているアナ。」

「僕はタケル、よろしくアナちゃん。僕たち旅行先に向かってる途中に霧のせいで道に迷っちゃって。それでこの島に上陸して霧が晴れるのを待ってるんだ。」

「ふーん、そうだわ！せっかくだからこのハンス島を探検してみない？私が案内するわ。」

「いいね、楽しそう！ちょっと待ってて。」

僕はそう言ってお父さんとお母さんの所に行った。

僕が事情を説明すると、一時間だけという約束でOKしてくれた。

「気を付けてね。」

「あまり離れたところに行っちゃだめだぞ。」

お父さんとお母さんの言葉を背に、

「わかってる。」

僕はそう言って再びアナのところに向かった。そして僕たちのハンズ島の探検が始まった。僕は歩きながらアナに聞いてみた。

「この島の管理人って、どんな事をしているの？」

「生き物たちの見回りをしているのよ。」

「この島に生き物がいるの？」

「ええ。でもね、個々の生き物はすごく変わってるの。」

「ふーん、どんなのがいるの？」

「そうね。エレファンテとか。デッグとかかな。」

「エレファンテ？ドッグ？なんだよ、全然珍しくないじゃん。そんなの僕たちが住んでるところや動物園

にも、たくさんいるよ。」

僕はそう言って大笑いした。その時！隣の茂みがガサガサと音を立てた。

「なんだなんだー？」

僕がそう言うと、茂みの中から何かが出てきた。え

!!！

「ほら、この子がエレファンテよ。」

「この子がエレファンテ？でも、え…？…あ…足、え？」

「言い忘れていたけど、この島に住んでいる動物たちは、全員手首から先つちよしかないの。」

「ハンズ島の『ハンズ』って、手“って意味だったのか。」

「そうよ。私はそのハンズたちのお世話をしているのよ。」

アナは少し誇らし気に言った。

「それでエレファンテはどんな動物なの？」

「エレファンテはこの島の中でも最大級のハンズよ。群れて移動したり、水浴びしたりするわ。」

「普通の象と同じだね。」

「この子がデッグ。」

「犬の前足だ。こいつ、野犬じゃないよね。」

「大丈夫よ。おとなしくて安全な生き物よ。穴を掘って大事な骨を隠したり、私と一緒にボールで遊んだりするわ。」

アナがそう言うと、デッグは突然、近くの湖に飛び込んだ。そして潜っては上がつてを繰り返した。

「あーいぬかきしてる。」

「そう、デッグのいぬかきってバタフライみたいでしょ。」

「あいつは？もしかして猫？」

「うん、マウンテンキャットよ。」

「マウンテンキャット？あ、ヤマネコ？」

「そう。昼はこうやって寝てることが多くて、夜によく走り回ったりするの。」

「ヤマネコは夜行性だもんね。」

「ん？竹に掴まっているあのハンスは？」

「あれはバンド。」

「ああ、バンドとバンドをかけたのか。」

「まあね。このバンド、いつもこの竹にずっと掴まっているの。」

「そんなに竹が好きなんだね。」

僕が空を見上げると、何やら羽のようなものが空を飛んでいた。

「あれもハンスなの！？」

「ええ。あれはテカ。空飛ぶハンスの中で一番強いだよ。知能も高くてもものすごく早く飛べるの。」

「あーあっちに飛んでいるのは？」

「どれどれ？」

反対側の空から何かが飛んできた。

「あれはテンビよ。テンビは飛ぶ時のバランスをたもつために羽根を水平にさせて滑空するように飛ぶわ。」

「あ、今度は花の所に何か来た。ものすごい速さで動いている！」

「ハチンドリね。ハチンドリは羽根を一秒間に55回、最高で80回羽ばたくことができるのよ。」

「一秒間に80回ものすごく疲れそうだな。」

「あーあれ、マウンテンゴリラよ。」

「ゴリラ？」

「力が強くて、時に岩を砕いちやうことだってあるんだけど、仲間にはすごく優しいの。」

「へえー。」

その時どんなという音が響いた。ビックリした僕は、思わず茂みに隠れた。

「マウンテンゴリラは、ああやって地面を叩いてドラミングするのよ。大丈夫、怒っているんじゃないくて、仲良くしようと伝えているの。」

ホッとした僕は、茂みから出て来た。気がつくといった間に約束の時間が経っていた。僕はアナにお礼を言った。

「色々なハンス達を見せてくれてありがとう。ハンス

島って、すごく豊かな島だね。」

「なんかもつと探検してみたくなっちゃった。」

すると奥の茂みからお父さんがやってきた。

「おい。霧が晴れてきたから出発するぞー。」

「はい。ごめん、もう行かないや。」

「そう、残念だけど仕方がないわね。あ、じゃあこれをあげるわ。はい、この島のハンスたちをすべて記録した本よ。」

アナがそう言って分厚い本を僕にくれた。

「わあ、ありがとう!! それじゃあ、またね。」

僕は手を振りながらお父さんのいる方へ走った。

僕たちは再び目的地のモンモン島へ向けて出航した。少ししてふと振り返ると、ハンス島の姿は一切見えなくなっていた。まだそれほど遠くまで来ていないはずなのに……。しかし僕の手には、アナがくれたハンス達の本が確かにあった。その本を見つめ、僕はまた来れると信じた。船長が言った。

「そういえば、この近くに美味しいフルーツがたくさんなっている島があるんだ。良かったら取りにいかないか。」

「いいですね。」

お父さんが言った。その島についた。お父さんたちが楽しそうにフルーツ狩りを始めた時、僕は何やら気配を感じた。辺りを見回した僕の目に飛び込んで来たのは見覚えのあるボロボロな看板だった。えっ!?!? 僕の不思議な旅は、まだまだ終わりそうにない。

【読売新聞社賞】

託されたもの

玖珠町立くす星翔中学校 一年

土佐路 美優
とさじ みゆ

竜と人は仲が良いと父からよく聞かされていた。何より、イギリスには竜の医者と麒麟の医者が居るらしい。名をグルとクルル。特に何の変哲もない医者で外科医らしいが、私は知能で彼らを見ていなかった。やはり、見た目の美しさだろうか。それを見なかったのだと今では思っている。黒光りする鉤爪と、半透明な鱗をぜひ見てみたいと思った。

7月ごろだっただろうか。私がベッドで横になっていると、コンコンと軽く扉をノックする音が聞こえてきた。

「はい。今から出ます。」

古くなった扉を力強く開けると、言葉も失ってしまった。何だってマゼンタの鱗を持ち合わせて、大きな翼が全身を包み込み、ヤギのように巻いた角をした竜と、額から角を生やす黄色い麒麟。どちらも白衣を着て真っ直ぐにこちらを向いて何かを言っているのだ。「あのー聞いてますか？あなたの病気の話ですよ？どこの病院でも否定されたのなら聞いてください！」突然言われた私はおろおろしながら聞き返してしまった。

「何の話でしたっけ？貴方たちは？」

首を傾げていると竜はため息をついてから、麒麟をつれて家に入ってくる。

「発症したら最後。お前は死ぬってことだな。そして、俺はグル。麒麟は助手のクルルなのだが、いちばんはお前の父親に用がある。」

「どういうことですか？父さんは居ないんですけど、母さんなら帰ってきてます。」

「そうか。クルル、ロバン・チャールズのことは誰にも言っていないかな？」

「言ってません。この子の父親ならフランスですけど、とにかく手術してから話しましょう。先生も良いですよね？」

クルルさんがグル先生をジッと見つめると、

「そうだな。」

と静かに告げたのだ。どういふことなのかも自分の病さえよく分らない私を置いて、話はどんどん進む。

「まあ、ついて来てください。」

最終的にはそう言われ、私はクルルさんらについて行くこととなった。

一時間二時間と歩いていたら足が痛い。俺だって俺なのにクルルが徒歩にしようだなんて言うからだ。いくら山奥だからって暑いのだが、暑いかと聞いたら患者は皆、遠慮して暑くないと言う。まったくの嘘だ。

こいつの親父だって遠慮してたのに今では俺に治せと命令している。まあ、治すのが医者だから俺とクルルは良いのだが何より、この少女が可哀想だった。

「やっと着いたあー長いですね。」

額の汗を拭うと、クルルは少女を病院内に入るように言ってから俺に小声で言う。

「預かってほしいと言われましたけど、無理ですよ。あの子、確かロンでしたっけ？手術する時とか大丈夫なんですか。」

「メンタルの問題だ。お前も慣れたろ。」

そう返して、ロンの居る待合室に行った。すると、イスの上で髪を広げて眠っている。これはむしろ好都合であった。

「ベッドに乗せて運べ。酸素ボンベと点滴スタンドもな。」

「はい。」

手術着に着替えてオペ室に入ると、セッティングも

終わり、クルルと着替えている。よし。大丈夫だなと全て確認すると、指示を出した。

「酸素マスク。吸ったか確認。」

「吸ってます。」

「なら、麻酔薬投与が終わったら管を入れ、確認してくれ。」

「はい。」

管を口からゆっくり通すと、クルルがオーケーサインを出した。ここから勝負だ。

「メス。」

手をさし出し言うと、クルルが素早くメスを手に持ち俺の手に渡した。メスを胸に入れて同じ力でやさしく引き下げた。血がポタリと零れゴツセ開創器というもので開腹したところを引っ張り、大きく開いた。

「やっぱ居るなあ。」

思わず。そう口にしてしまった。

「厄介としか言えません。」

クルルも続けて言うと、こうも言い放つ。

「切除不可能ですし。」

どうして切除できないのかと思うが簡単な話だ。心臓が半分近く生物によって侵されている。生物というのは胎児である。

「いいや。レーザーだ。」

「踏み切りましたね。」

俺が手のひらをクルルに向けるとレーザーをくれた。スイッチを押して、いざ焼こうとしたのだが、あることに気がつく。

「違う。心臓の外ではなく内だ!」

「内ですか?!」

「そうだ。こりゃ血管から少しずつつ出してやらないとな。」

「どうやって入るんです?!」

「双子だったのがたまたま心臓に入り込んだ。とても

稀なことだろう。」

「人工心肺装置。心臓を止める。」

「はい。設置しましたが、ピンセットで取り出すのですか？」

「ああ。かなり優しくな。」

ピンセットを受け取り血管から入れた。ゴツゴツと手ごたえがある。まるで蝶を愛でるように優しく掴むと、血管から頭を出した。俺はあまりの緊張に自分の心臓の音しか聞こえなかった。それからピンセットを差し込んで胎児を出すことに成功。

「やった。取り出せたあ！」

クルルが声を上げて喜ぶ。胎児は生きていなくて、形だけだが少女は生きている。そして俺は切り口を縫い合わせた。

「あれ？ここは？」

気がつく点滴を打たれベッドで寝ていました。クルルさんは居ない…。私は心配になり声を出すと、急

ぎ足でこちらに来る音がしてドアがガラガラと開いた。

「起きましたか。驚かないでくださいね。あなたの心臓には双子の姉が居たのです。」

「双子の姉？どういうことですか？心臓に姉が入っていたということなのですか？」

私が何も分からず混乱していると、膿盆に赤ちゃんが入っていた。とても小さい。

「これが、姉なんですか。」

思わず、口が動いてしまってクルルさんも

「そうです。貴方を守っていたのかも。」

と言いました。そこでふと思いやり、マゼンタの鱗が見えたような気がして、クルルさんに問いかける。

「グル先生は？」

「先生ですか。その、ロンさんに悪いのですが俺らはヨロツバを出ます。」

「出る…出るってどういうことですか。」

私はさらに続けると、クルルさんは二つに分かれた鉤爪でポケットに入っている紙を取り出してくれた。「竜界に行くんですよ。西洋の竜たちが沢山居て白いレンガで作られた家が特徴的なんですよ。」

「へえ。いい所ですね！私も行きたいな。」

そう口にした時、パツと笑みを顔全体に浮かべて弾んだ声で言う。

「行きましょう！歓迎しますよ。」

「いいんですか？やったあ！」

喜びの声を上げると、低い男の声がしてグル先生であるとすぐに分かりました。

「来るなら来い。背中に乗せてやるから。」

その言葉にもっとワクワクしたのだろうか。

「はい！」

とても大きな声で答えて、すぐに服を脱ぎ着替えた。空に出ると朝になっていて太陽がキラキラと光り輝いている中、私はグル先生の背に乗る。そしてゴツ

ゴツとした硬い鱗に抱きつくようにすると、翼を二回ほどバサリと動かし、閉じた目を開けてみたら、目の前に入道雲があるのだ。美しさとともに恐怖が湧き出てきて、下を見たら息を呑んだ。もう病院が遠くて見えない。見惚^{みと}れている内にクルルさんが雲の上を駆けながら言った。

「鳥や竜たちはこんな景色を見ているですよ。俺は点を駆け走るだけですけれど。」

クルルさんは苦笑いをして上を見上げる。

「先生。門番には何と言いましょか。」

「人に化けた竜だと言えば良い。」

「バレませんか。」

「ロンのことは上手く言う。」

グル先生は心強い言葉を残して門のある所までゆるりと翼をはためかせて、ついにその時がやってきた。「グルさんか。誰だね？その人間は。」

グル先生よりもっと低い声で言いジツと私の目を見

てきたのだ。そこでグル先生が言った言葉に門番も黙ってしまった。

「人に化けているが私の患者だ。通してくれよ。」

「本当に化けているだけなんです。私が怒られるんだから困りますよ。」

門番は眉をひそめると、小言を口にしながら門を開けてくれたのだ。

「もし化けてなかったらステーキでも奢ってやるよ。」

ニヤリと口角を上げると門を通り街に出たと思えば、そこは絶景！思わず叫びたくなるほど果てしなく広がる澄み切った山々と空を優雅に翔ける竜たちが目に飛び込み、その素晴らしさ魅了されてしまった。

「良い所ですね！なんて綺麗な山なんだろう。とても惹かれます。」

気持ちが高ぶりながらもグル先生とクルルさんそう伝えようと、誇らしい顔つきで口を開いたと思え

ば、とんでもないことを口にしたのである。

「庭程度さ。」

「もう少し進めばもっと広いですよ。ここは序の口なのですから。」

お二人の言葉に驚いてしまったのだが竜となれば範囲が広いのかとも思った。

「どこに行くのですか？ほら。国とか。」

「ファンタシーだ。建物が多いぞ。」

言った途端にスピードが速くなり、雲を突き抜け白いレンガの絶景が広がりマチュピチュを感じさせた。黒い岩山がそびえ雲の上に建物があるかのような景色。それはずっと続いていたのだが、ファンタシーに行き着くまでに日が沈んでしまったのだ。私が、ここで一番衝撃的だったのが月。

「竜界の月は青いのですね。」

「そりやそうですよ。海があると信じられていて、サーガラムンなんて言われているのですから。」

クルルさんが月を見上げると、私もジッと月を見つめた。

「もうすぐ着くぞ。」

「えーホントですか。」

「ああ。家に入ってからはずっくり休め。俺とクルルは少しだけ話すが。」

「分かりました。ありがとうございます。」

水色のレンガの家で降りてからドアを開けてみると、消毒液の香りがして、病院のようなイメージなのと裏腹、ソファやベッドは普通だ。私はクルルさんに一言告げて、ベッドで眠りにつこうと横になる。

「ロバンはフランスで何をしているんだ。」

先生が怖い顔をして聞いた。俺は何も答えられずに下を向いていたが、焦るように先生が言い直すと、俺は言い難そうにする。

「すまないな。いや、俺はただアイツがどこで何をしているかだけ知りたいんだ。」

「そうですね。：フランスのパリで医者をしているが、まあ人間関係が厄介だそうですね。」

俺が隠すように言うのと、それは先生にバレていた。

「たったそれだけか？」

「え？」

「何か隠しているんじゃないだろうな？」

「ええ…そんな。」

「あるね。隠している。答えてみる。」

「ロバンは死にました。」

「何だと？」

「先生に娘を頼むと言った夜の事です。俺に電話をしてきました。」

「ハロー。私だ。ロバンだよ。」

「なんだ？娘を預けといて今さら何だよ。」

俺は呆れながらも電話で彼の言うことをよく聞いた。

「二日後に俺は殺されちまう。嫁にな。」

「なんだと？」

「言葉の通りさ。殺されるの。」

「はあ？お前が？女に？」

「信じたくなえだろうが話を聞いちゃったよ。だからお前らが危ないことも分かった。」

「俺らが？あははは！馬鹿言うなよ。先生は竜だし、俺は麒麟だぜ？」

「それが向こうも竜なんだ。」

「ん？待てよ。人に化けてんのか？」

「そうだ。だから竜界に帰れ。」

「それは良いんだが、お前は？」

「医者として死ぬまで尽くすさ。」

「娘が可哀想だとは思わねえのかよ。」

「…ロンの前では強く見せたいんだ。」

「そうかよ。なら上手く言ってやる。」

「貴方の父は自分の考えを貫いた。」

俺は家事をしながら、

「父の話をしていたけれど、何の話だったのですか？」
という問いに対しての答えを口にした。

「貫いた…ですか。」

「はい。良い人でしたよ。今も昔も。」

「…そうですね。グル先生に私のことを話したそうですが、なんて？」

「ただ、神の手を持つ先生に娘を助けてほしいのだから。一言。グル先生は泣いていましたよ。」

「人に頼まれたことがなかったから。」

「頼まれたことがなかった？」

「はい。運ばれることがほとんどで、誰かが必死に…しかも娘のことを先生に助けてほしいのだからと言ったのです。」

「そう…なんですね。私には自覚がなくて、よく咳なんかはしていたのですが。」

ロンさんは胸を抑えると、笑った。

「まさか赤ちゃんが心臓に居るなんて。」

（まさかロンさんが竜のハーフだなんて…思ってもいなかった。）

俺はどうしようもなく焦った。クルルが心配してくれているが、分かったことが多すぎて頭も痛い。ロバンの嫁が竜だったこと。人に化けていて、その話を聞いたロバンがパリで殺されてしまったこと。実はロンがハーフで半竜であるということは確かである。けれども、問題はロンに何というかだ。突然だが貴方は半竜で、人とのハーフです！なんて言われてもピンとこないだろう。

「グル先生。どうしたんですか？」

ロンが透き通った声で聞いてくるものだから俺は一息おいて、話をした。

「鱗が出るーって考えながら自分の手を見てみる。」

「え？はい。」

自分の白い肌に視線を移すと、パキ。パキと白い鱗が生えた。

「これって…。」

「魔術さ。竜界では竜で居た方が良い。」

俺はそう言って白竜のような姿のロンを目にした。彼女は美しい。

「…自分とは思えませんね。」

「慣れれば良い。俺らは患者の所に行くからお前は留守番をしてくれ。」

「え？私も行きますよ。」

「何をするんだ？」

「手伝いですよ。クルルさんと先生の。」

「マジか？」

整理がつかない。どうしてそんな考えに至ってしまったのだろうか。徳はないのに。俺はしばらく口を少しだけ開けてポカンとした。

「はい！お力になりたいので！」

「…先生、いいでしょう？」

ひょっこりとドアの隙間からクルルが顔を出す。俺は仕方ないかと声を上げた。

「ならさっさと行くぞ。」

こうして三頭は患者のもとへ向かう。…俺やクルルと出会ったのもあの子の運命だったのだろう。娘の裏で命を捧げたロバンとそれ知らないロンを見て、どこか後悔の表情を浮かべた。

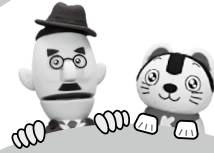
「患者の頼まれごとです。頼まれたんならやってやりましょうよ。」

クルルが口にした言葉だった。それを聞いて思い出す。

「娘のためなら命なんて容易いものさ。」



【高校生の部】





【大賞】

昆虫革命

金沢大学人間社会学域

学校教育学類附属高等学校 1年

かみや
神谷 ましろ

その地に住む者たちにとって花畑は特別だった。甘い蜜は虫たちを魅了し、柔らかな土は翼をもたぬ生き物たちを優しく包み込む。雨の降る日は不安と恐怖を消し去り、代わりに安心と安らぎを与えた。誰もが平等に幸せを与えられ、誰もが自分の幸せを理解していた。いつしか、幸福者たちは、花畑を「自由の園」として、愛し崇拝するようになった。しかし、幸福者たちは、己の幸せを理解しても、他人の幸せを望むことはしなかった。美しさを誇る蝶と独占欲におぼれた蜂は、自分たち以外の生物にも、この樂園が開かれていることを許せなかった。そして、春風に祝

われるように行われた、アゲハ十六世とビートワネットの結婚により手を組んだ蝶と蜂によって自由の園は完全に閉ざされてしまった。ハエや蛾、モグラや蜘蛛たちは花畑から追放され、光も思わず姿を隠してしまうほど、深く湿った、息の詰まりそうな森の中で生きなくてはならなくなった。

時が流れ、支配という名の陰惨な吹雪に耐えかねた哀れな虫たちは、いつしか自由の園を夢見ることにすら困難になっていった。初めから自分のいるべきところはここだったのだと錯覚する虫まで現れた。わが身に降り注ぐ悲劇に抗おうとする希望の灯火は、一つまた一つと消えていった。しかし、この残忍な風は一匹の虫の燎原りやうげんの火のごとく輝きを放つ情熱だけは消すことができなかった。そして、その虫こそ後の昆虫革命で英雄と呼ばれることになる誇り高き蛾の統率者「ガポレオン」であった。

ガポレオンは常に虫たちの憧れだった。軍事的才能に恵まれ、聡明だった彼は自由の園にいた頃も重要な虫であるとして高い地位についていた。自身も蛾であつたためか、他の虫に対する偏見や差別はなく、多くの虫に慕われていた。だからこそ、虫たちは、自由の園から追い出された時、輝く王冠のような彼が、このはじめじめと陰鬱な空気の漂う森の中でさびつてしまうことを恐れた。しかし、この出来事がガポレオンの中に眠る、自由への強い執着と勝利への野心を呼び覚まし、彼を革命へと導いたのだった。

ガポレオンは革命に必要なものを考えた。当然強い軍事力は欠かせない。自由の園を支配している蛾や蜂は特別に訓練されており、ハチドリという強力な戦力も保持している。またともに食事もとれていない追放者たちが正面から戦つて勝つことは不可能なのである。さらにガポレオンは革命を起こすに当たつて

最も重要なことは強い信念であると考えた。地獄のような戦場で、望むべき未来が明確であることは、虫たちを一つにし、戦い続ける意思を絶やさないとつながると、彼は今までの経験から学んでいたからだ。ガポレオンは革命を起こす仲間を集うために近々演説を行うことを考えた。そして、革命の正当性を証明できる情報を集めるために、彼は、森の中で最も多くの秘密が集まる伯爵夫人の店へ向かった。

夫人の店は追放者たちの居住地から離れた大きなキノコの下にある。どこか歪^{いび}て怪しい雰囲気があふれるこの店は新鮮な水やさっぱりしたキノコ料理を提供してくれるにもかかわらずいつの間にか荒くれ者たちのたまり場となっていた。ガポレオンは扉の前に立つ。ドア枠がゆがんでいるせいで、扉がうまくはまっていない。ここで喧嘩でもしたのだらうボロボロになった壁の隙間から光が漏れ出ている。ガポレオン

は紳士のように丁寧にノックをしてから店に入った。格好よく決めるつもりだったが、羽が、ムンクの叫びのごとくうねった入口に引つ掛かり、少しよろめいてしまった。中は賑やかだった。何匹かの蛍が円いテールを囲むようにして集まり噂話に花を咲かせていた。外から見えた光は彼等のものだったのだろう。店の奥ではモグラやミミズ、蜘蛛たちが伯爵夫人の年齢を予想する賭けを行っていた。それを尻目に伯爵夫人は、陽気な鼻歌を歌いながら食器を洗っている。その夫人の前のカウンターにはよく知る背中があった。片方の羽に三角形の切れ込みがある。ガポレオンの昔からの親友、ハエの「スピード」だ。名前の通り彗星のような速さで飛行するのだが、あの羽でどうやって飛んでいるのかは謎だ。本人曰く戦いでできた勳章だそうだが、夫人は磨きたての床で滑ってできた傷だと言っていた。真相はハエの中である。スピードに声をかけようとしたその時、夫人がガポレオンの存

在に気付いた。

「まあ、ガポじゃないか。いるならそう言うておくれよ。あたしに大事なお客を放置させる気かい？」

夫人は言った。無邪気な笑顔がまぶしい。この飾り気のないおおらかな様子に世間からはみ出し者も身を預けに来るのだろう。夫人は昔から長い名前が好きじゃなかった。だからガポレオンのこともガポと呼ぶし、自分のことも夫人と呼ばせる。一般的なテントウムシの家系に生まれた夫人は、伯爵夫人になるのが夢だった。その夢も楽園からの追放を機に失われてしまったが、言葉で自分を着飾るのに楽園は必要ないと言って、伯爵夫人と名乗るようになった。だから、夫人は伯爵家の虫でもなければ夫人でもないのだ。それでも虫たちはみな、親しみを込めて婦人と呼ぶ。夫人が夫人であることは、楽園から零れ落ちた我々にもまだ自由が残っていることを教えてく

れるからだ。夫人の言葉に反応してスピードが言った。
「本当じゃないですか！ガポレオンさんもこっちに来て飲みましようよ。朝露の残りが割引されているんですよ。」

セリフが言い終わる前にガポレオンはスピードの隣に座った。朝露の用意をしようとしていた夫人にガポレオンは触角を横に振って合図を送った。夫人は手を止めてすぐカウンターの方へとやってきた。

「はあ、あんたはいつになったらあたしの料理だけを目当てに店に来てくれるんだい？」

夫人はあきれたように言い放った。ガポレオンは、申し訳ないような笑顔を浮かべたが、

「夫人にしか聞けないことなんだ。」

というと夫人はしぶしぶ承諾した。

「今度、民衆の前で演説をしようと思っている。自由の園を取り戻すための：革命に賛同してもらっためだ。」

ガポレオンは周りの虫たちに聞かれないよう声を潜めて話し出した。

「か、革命!？」

スピードが驚きのあまり声を上げた。ガポレオンが睨みつけると愚かなハエは慌てて口をふさぎ、ダンゴムシのように縮こまってしまった。ガポレオンは話を続けた。

「自由の園と森の中は完全に隔てられているだろう。だから蝶たちが自由の園で何を行ってゐるかわからないんだ。この革命の意義を皆に伝えるには、あいつらが自由の園を支配するに当たらない下劣な虫だってことを、どうしても証明しなきゃいけない！」

ガポレオンの声に熱が入る。夫人は一瞬悲しげな表情を見せたが瞬きする間にいつもの穏やかな表情に戻った。

「ねえ、ガポ。自由の園を取り戻そうっていうあんたの考えは立派で勇敢だと思う。けどさ森の中だって、

住めば都っていうじゃない。慣れてしまえばこもあつたたちの故郷になるんだよ。高望みなんてしなくたつていいじゃないか。こんな頻繁に自分たちの世界が変わつてちや、みんな疲れちゃうよ。」

夫人の言っていることは決して革命への恐れから生まれたものではなかった。しかし、自由を求めるガポレオンには、敬愛なる夫人の言葉すら臆病者の言いつにしか聞こえなかった。

「高望みなんかじゃない。我々には、初めからあの地で生きる権利があるんだ。義務は放棄できても権利を諦めるなんて選択肢は存在しないんだよ。」

ガポレオンの口調はどこか冷酷で威圧感があつた。数秒の沈黙の後、夫人は螢たちが食べ終わった食器を回収してくると言つてその場からいったん離れた。スピードは不安そうにガポレオンを見ている。彼の知っているガポレオンはこんなふうに冷たい話し方をする虫ではなかった。

数分経つて夫人が戻ってきた。

「あんたの言いたいことはよくわかつたよ。あたしのわかることなら教えてやるさ。あまり気乗りはしないけどね。」

夫人は言つた。ガポレオンは深く感謝するとお手本のようになさやかな笑顔を作つて見せた。夫人は苦笑いしながら話し始めた。

「あたしのこと、いつか伯爵夫人にしてやるつて大口叩いてた奴がね、花畑にいるのさ。あたし達が追放されたとき何もしてやれなかつたこと、未だに引きずつててさ、たまに樂園から抜け出して、あたしのところに来るわけ。その時に結構、花畑の話もしてくれるんだけど、あつちはあつちで大変らしいのよ。なんでも、女王蜂様の浪費癖がそれはそれはひどいみたいでね。自由の園にしかない貴重な花の蜜を散々搾り取つて、それででっかい蜜の池を作つたそうなの。あいつらハチドリを雇つてたじゃない？ 契約に使われてた

のがその蜜だったらしくて、貴族たちは民衆から蜜を奪い取るのに必死なんだってさ。」

夫人の話を聞く限り自由の園はこの数年で悲惨な状態に陥っていた。大量の蜜の栽培、さらに蜜の代りに花自体を刈り取り始めたことで、花畑の花は、もともとあった時より三割も減少してしまったという。肝心の蝶王は、政治に興味を全く示さず、民衆の不満にも一切耳を貸そうとはしないそうだ。ガポレオンはこれを好機だと考えた。楽園側の虫に何匹か不満を持つ者がいる状態なら、いざ戦った時、革命側に寝返る虫が出てくるかもしれない。予想外なことが戦場で起これば、いくら洗練された蝶や蜂たちであろうと、多少は取り乱すはず。そして、僅かな乱れはより大きな損失へつながるだろう。ガポレオンはここに勝利への可能性を見出したのだ。

「あとは戦力さえどうにか出来ればいいのだが、さすがに蛾やハエだけでは……。」

思わずガポレオンの心の声が漏れた。それを聞いた夫人は、目線を店の奥にやり、脱獄を計画する犯罪者のごとく不敵な笑みを浮かべながら言った。

「なんだ、戦力ならちようどいい奴らがいるじゃないか。品性のかけらもあったもんじやないが、力だけは無敵に強いやつらが。」

ガポレオンとスピードは夫人に導かれるようにして目線を店の奥に移した。そこには、店に入った時に意気揚々と賭けを行っていたモグラたちの姿があった。それを見たスピードが驚きのあまり声を裏返しなから叫ぶようにして言った。

「せ、戦力って、まさか”羽なし”のことだったんですか!? やめた方がいいですよ。あいつらが森の中で盗みや暴力を働いているのはよく知ってるでしょう? あんないかれたやつらを仲間にするくらいならアメンボを仲間にした方がましだ!」

「ハハッ、だれがいかれてるって?」

背後から低く重い声がのしかかってきた。恐る恐るスピードが振り返ると、そこにはあのモグラたちが大樹のごとく連なっていた。スピードはあまりの恐怖からハシビロコウのように固まって動かなくなってしまう。モグラはガポレオンのことを気にも留めず夫人に話しかけた。

「夫人さんよお、今日の料理はいつにもまして絶品だったぜ。ところであんた今いくつなんだ？俺たちそれで賭けしてるんだよ。ちなみに俺は三十代後半だと思越しているが実際はどうなんだい？」

「ばかだねえ、言いやしないよ。こう見えてあたしも一応レディなんだからね。」

夫人はどんな生き物にも平等に相手する。下に出るわけでもなく、かといって上から目線なわけでもない。それは、羽なし達に対しても変わらなかった。

自由の園が閉鎖されたとき、追放されたのは虫だけじゃなかった。モグラやミミズなど地中で生活を送

る者たちは、羽をもたない野蛮な生き物として他の虫たちと共に、森の中へ追いやられていたのだ。ただし、蛾やハエとは異なり、楽園内にいたところでさえ、周囲の虫たちから避けられていた彼らは、もともと気性が荒かったのと、生活環境が急激に変化したことによるストレスで、弱い虫たちから略奪行為を繰り返すようになっていた。森の住民たちはいつしかモグラたちを羽なしと呼ぶようになり、愛しの我が子には『羽なしと関わってはいけない』と教えるようになった。ガポレオンもまた、羽なし達を軽蔑する虫の一人である。しかし、今のガポレオンには、革命で勝利を収めるためなら、どんな犠牲を払っても構わないという覚悟ができていた。ガポレオンは石像と化したスピードを横に置き、代りに自分がスピードのもとといた場所に座った。そして、羽なしに向かってゆっくり話し始めた。

「君たちに頼みがある。自由の園を開放する戦いで

我々に力を貸してくれないか。」

初めはガ・ポレオンを敬遠するかのような態度をとっていたモグラであつたが、自由の園という言葉聞いた途端、表情が変わつた。ガ・ポレオンは続けた。

「お前たちの力は我々と比べ物にならないほど強い。この際、お前たちの今までの行いには目を瞑ろう。自由のために共に戦つてはくれないか。」

モグラはようやくまともに、ガ・ポレオンの方へと体を向けた。そして、地鳴りのような低い笑い声を出しながら言つた。

「ブワハッハ、こんなアホみてえなこと言いだすなんてどこのどいつかと思えば、かの有名なガ・ポレオンさんじゃありませんか。」

ガ・ポレオンは鋭い目つきで睨みつけたが、モグラはとどまる所を知らない。

「まったく面白いこと言ってくれるぜ。俺たちだって好きて蜚行を働いているわけじゃねえさ。もとはとい

えば、お前さんたち森の虫が、羽なしとか言つて俺たちのこと、仲間外れにし続けたのが悪いんだらう。自業自得としか言いがたいな。」

「なんだとー楽園にいた時だつてお前たちは好き勝手、土を掘りまくつて花をなぎ倒していたじゃないか。森の虫たちに拒絶されたつて、それこそお前たちの自業自得だー！」

いつの間にか復活したスピードが無我夢中で反論する。しかしモグラは、小バエの喚き声など聞く価値もないと言わんばかりにガ・ポレオンを挑発し続ける。

「ガ・ポレオンさんよお。そんなに楽園が恋しいなら、蝶のふりして仲間に入れてもらえばいいじゃないか。同じチョウ科の生き物なんだからよ。あつ、やつぱり無理か。そんなボロ雑巾みてえな羽してる奴、蝶にはいないもんなあ。」

この言葉はガ・ポレオンの中にある大切なプライドを傷つけた。自分自身のみの名誉に関わることであつ

たのならガポレオンは動じなかったであろう。しかし、彼は自分が蛾の一族であることに誰よりも誇りを持っていた。そして先ほどのモグラの言葉は、彼だけでなく、彼の一族全てを貶^けしたのだ。ガポレオンは屈辱に打ち震えながら吐出すように言った。

「お前たちのような羽なしに同意を求めたのが間違이었다。蛮族には自由を語る資格などない。一生、岩のように固い土の中で眠り続けるがいい。」

ガポレオンは羽なし達に背を向けて店を出ていこうとした。夫人は自分が招いてしまった争いに收拾がつかなくなりあたふたしている。心配そうに見つめるスピードとは対照的に、モグラ以外の羽なし達は、目を合わせながら意地が悪そうににやけている。昆虫と羽なし達の間に流れる川の流れが濁流へと変わった、誰もが確信したその瞬間、モグラが言った。

「悪かったよ。そんなに怒るなって。俺たちも切羽詰まってるさ、つい生意気なこと言っちゃうんだ。」

「ボロ雑巾と手を組むのはいやなんじゃないのか？」

ガポレオンが冷たく言い返す。

「さっきはああ言っただけだよ、俺たちも森のごつごつした土じやまともに寝れねえんだ。いい夢なんてこの数年見れてねえ。自由の園に帰れるんならその方がいいに決まってる。それに、俺達にはボロ雑巾の方がお似合いだからな。」

モグラはガポレオンに向けて手を差し出した。モグラの取り巻きと思われるミミズや蜘蛛はボスの態度の変わりように困惑している。ガポレオンは引き返し、疑わしげにモグラを見ながら言った。

「これは、ただの暴動なんかじゃない。今後の世界に永遠に語る継がれるであろう革命、”昆虫革命”だ。この意味が分かるか？」

「ああ、自由のための戦いだろ？よく心得てるさ。それと、俺の名前はジャグラだ。」

二匹の動物は握手を交わし、ガポレオンの演説が終わり次第、作戦を立てることを約束した。そしてガポレオンはスヒードと共に店を後にした。

「あんた何か企んでるんじゃないでしょうねえ、急に謝ったりなんかして。」

夫人がジャグラに問いかける。

「まさか、ただ俺は俺のかわいい子どもたちに幸せな夢を見せてやりたいだけさ。」

ジャグラは窓の外を見た。いつの間にか店を出ていた蛭たちの姿が深い森の中へと吸い込まれていった。

あと数分でガポレオンの演説が始まる。森にいる生き物たちは英雄の言葉を聞くために我先にと大きな木の根元に集まった。森で一番目立つこの木の下でガポレオンは演説を行うのだ。

「見てくださいガポレオンさん！もうこんなに虫が集まっていますよ。ほら羽なし達も見に来てます！大丈夫

夫ですか？緊張していませんか？」

スヒードは本番直前の大スターに話しかけた。スターは親友に微笑みかけると、堂々とした足取りで観客の前に現れた。

「皆さん。今日はよく来てくれました。」

典型的なあいさつで演説を始めたガポレオンは聴衆の顔を一匹も余すことなく見渡した。

「あなたたちには見えるでしょうか。あの美しく輝く樂園が。感じる事ができるでしょうか。私たちを優しくなでる心地よい風を。想像することができるところか。柔らかな土の上で眠り、穏やかな花の揺らめきで目覚める自分たちの姿を。これらの幸せは、かつて、ここにいる全ての生き物のもとに、平等に存在していたのです。」

ガポレオンの魅力的な話し方に生き物たちはみな呼吸することも忘れるほど真剣に聞き入っていた。

「私たちの幸福は、常に何か大きなものに守られてい

るのだと、あの頃の私たちは、ただ漠然と、そう感じていました。そして、この終わりの見えない闇の中に放り込まれたとき、はじめて私たちは自分の幸せが絶対ではないことを知ったのです。では、いったい誰が私たちの幸福を守ってくれると言うのでしようか。私は、己の幸福を守れるのは己しかないかと確信しています。」

ガポレオンの言葉に皆困惑した。この小さな者たちには、運命というのがどれほど傲慢で理不尽なものなのかよくわかっていた。だから、その場にいた誰一匹として、この人生に疑問をいだいたことはなかったのである。

「いつまでこの悲劇を演じるつもりですか。敗北を、新たな苦しみを恐れているのならそれは間違いです。この戦いの果てに待っているものが、自分たちの魂を削って得たものがそんな結果であるはずがない。何度も繰り返した絶望は今や私たちを鼓舞する希望

へと変った。戦おう諸君！我らの幸福のために。進もう諸君！我らの自由のために。この世に不可能なんてないのだから！」

虫たちは感動に震えた。羽なしてすら歓声を上げている。ガポレオンもまた余韻に浸っていた。革命に燃える群衆。悲鳴のごとく飛び交うガポレオンへの称賛。これこそ彼が望んでいた最高の光景だったのだ。

演説後、ガポレオンはスピードと共に夫人の店へ向かい、ジャグラーたちと合流した。作戦は、ハチドリたちの動きが鈍くなる雨の日に行われることになった。革命の足音は、もうすぐそこまで聞こえていた。

時はきた。昨日まで意気揚々とその姿をさらしていた太陽は、今ではどこにいてもわからない。自由の園の前には森中の生き物が集結した。蛾、ハエ、螢、テントウムシ、モグラ、ミミズ、蜘蛛……数え切れない種類の生き物がきれいに隊列を組み、雨が降るのを今か

今かと待ちわびている。自由の園側の昆虫たちも異変に気付いていた。蝶王は、花畑にいる全ての兵士を徴集し、戦いに備えた。

そしてついに戦いの始まりを知らせる雨が一粒、ガポレオンの触角に流れ落ちた。

「今だ！勇敢なる森の戦士たちよ、進め！」

ガポレオンの声に、生き物たちはいつせいに飛び出した。

入って早々に、ハチドリが勢いよく襲い掛かってきた。いくら雨が降っているといえども、やはりハチドリの力は凄まじく、怖気づいた虫はすぐになぎ倒されてしまった。しかし、ガポレオン達はひるむことなく作戦を決行した。初めに、ハエを中心に、蛾以外の飛べる虫たちを、一か所に集め、黒雲のような虫の集合体を形成した。完成した大群は、まとまって一気にハチドリを囲い込んだ。ハチドリがこの黒雲から抜け出せないように虫たちは彼らの周りを四方八方に飛び回

ることで、ハチドリの動きを封じた。そして、そのまある地点へとハチドリを誘導していった。何が起きているのか理解できず慌てふためくハチドリの翼に何やらベタベタした系のようなものが絡みついた。それは、蜘蛛たちがあらかじめ仕掛けておいた罠だった。蜘蛛の系によってハチドリは完全に身動きを封じられてしまった。さらに、革命軍の攻撃は続く。力のあるモグラ達は草の大砲を用意した。選り抜かれた丈夫な草の先端を引っ張り、そこにミミズが乗った。モグラは狙いを定めると勢いよく手を放しミミズたちは天高く舞い上がった。そしてそこには、衝撃のあまり動けなくなっている黒雲の被害を免れた運のいいハチドリたちがいた。打ち上げに成功したミミズたちはハチドリに巻き付くと一気に地面まで叩き落した。これにより、形勢は一気に革命軍へと傾いた。しかし、楽園軍も黙ってはいなかった。兵士たちを呼び寄せたかと思うと、瞬く間にきれいな正方形の陣形

を何十個も作り出した。蝶と蜂で構成された兵士たちは、それぞれ、松ぼっくりの傘でできた盾と、松の葉が差し込まれた剣を持っていた。この小集団的な戦い方に、一対一の戦闘を想定していた、ガポレオン率いる蛾たちは苦戦を強いられた。蛾たちは散らばらざるを得なくなり、一対多数の状況ができてしまった。蛾は徐々にやられていき、ついにガポレオンも蝶の集団に囲まれてしまった。ここまでかと、ガポレオンが死を覚悟したその時、美しい正方形の陣形が花火のようにはじけ飛んだ。ガポレオンが下を向くとそこにはジャグラがいた。なんとジャグラは草の大砲にミミズではなく泥団子に乗せて発射していたのだ。それだけではない。先ほどまで、ガポレオンの行く手をふさいでいた蜂の姿が跡形もなく消えていたのだ。モグラたちが倒したにしても数が合わない。そこへ、敵の位置を把握するため偵察飛行をしていたはずのスピードが矢のような速さでガポレオンの所に

やってきた。

「大変ですガポレオンさん！女王蜂捕獲のために戦っていたテントウムシと蛭たちのとこに急に大量の蜂が向ってきたんです。おそろくビートワネットが身の危険を感じて呼び寄せたのでしよう。敵の少ない今がチャンスです。蝶王がこの先に逃げていくのを見ました。急いで倒しに行ってください！」

ガポレオンはジャグラに合図を送るとスピードに言われた通り、アゲハ十六世めがけて猪のごとく突き進んでいった。蝶王の周りには三匹の護衛蝶がいた。ガポレオンはそのうちの一匹を倒し、残りはジャグラの砲撃と共に散っていった。また、この砲撃に巻き込まれた蝶王は羽が折れ、ともに飛ぶ事も出来ずに楽園の土の上へ、落ちていこうとしていた。蝶王は死ぬ。革命軍の勝利。これ以上ガポレオンが手を下す必要はなかった。そうガポレオンが思った時、彼の頭にある考えがよぎった。そして、ガポレオンは桜の花びら

のようにふわふわと落ちていく蝶王に近づきとどめを刺した。それから蝶王の羽を一枚ちぎり声高々に宣言した。

「ここに集うすべての生き物たちよ、よく聞け。蝶王アゲハ十六世は、このガポレオンの手によって死んだ。戦いは終わりで。我々が勝つたのだ！」

自由の園にあらゆる生き物の叫び声が響き渡った。そこには、勝利への喜びも敗北への悲しみもこの世のすべての感情が含まれていた。ジャグラはガポレオンを見た。この勝利に自分がいかに貢献したかを考えると彼は自分を誇らしく思わずにはいられなかった。そしてこの気持ちも、共に戦い抜いたガポレオンと分かち合いたかった。彼は、今では、ガポレオンを本当の友達であると思うようになっていた。しかし、ガポレオンがジャグラの方に振り向くことはなかった。

戦いが終わり、勝利の宴が行われた。皆が喜びに浸

る中、ガポレオンだけは別のことを考えていた。蝶王を倒したのはガポレオンではなくジャグラだった。彼はすでに死ぬ運命だった蝶王の死を、ほんの少し早めただけである。ガポレオンは不安だった。このことが皆に知れ渡ったらどうなる。きっと、ジャグラを英雄だのヒーローだの言ってもてはやすだろう。そして自分はどうなる。自由の園はガポレオンではなく、羽なしのものに、いやジャグラのものになってしまふのだろうか。それだけは、絶対に、絶対にあってはならない。そう、自由を手に入れたというガポレオンの願いは、いつしか自由の園を手に入れたという欲望へと変っていたのだ。

翌朝、ガポレオンは再び群衆の前で演説を行おうとしていた。自由の園の奪還を祝うために。虫も羽なしもみんな集まっていた。ジャグラはこの演説でガポレオンが自分のことを称えてくれるだろうと期待に胸

を膨らませていた。そして演説が始まった。

「あなた方の流した血が、あなた方の味わった苦しみがすべてこの時のためであつたことを思えば、痛みも悪くないと思えるでしょう。この戦いにすべてをかけた勇敢な者たちに私は心から敬意を示そう。」

ガポレオンの言葉に誰もが誇らしげだった。

「諸君、我々は新たな戦いを生まぬためにも蝶や蜂を許さなくてはならない。君たちならできると信じているよ。この楽園はすべての”昆虫”に開かれていなければいけないのだから。」

ジャグラは嫌な感じを覚えた。頭の中で、今まで感じてきた違和感が一つに繋がろうとしていた。果たして昆虫の中に羽を持たない自分たちは含まれているのだろうか。そして、彼の嫌な予感は的中した。

「ところで誠に残念なのだが、諸君らに言わねばならないことがある。そこにいるジャグラというモグラだが、彼はこの戦いで、あろうことは我々に向って大砲

を発射してきたのだ。蝶王との戦いで、手柄を横取りするために私に向かって恐ろしい泥の球を投げつけた。運良く助かったが、そのせいで彼は私の信用を完全に失ってしまったよ。信じようとしたがやはりだめだった。君たち羽なしはここにはいけない。」

啞然としている羽なし達の前にハチドリが現れた。ハチドリは羽なし達を次々と楽園の外へと放り投げていく。

ジャグラは裏切りに対する怒りと自分のせいで仲間が追放されていくことに対する罪悪感で頭がどうにかなくなってしまっていた。ジャグラは叫んだ。

「約束が違うぞガポレオン、皆の自由のために戦ってきたんじゃないのか！」

ガポレオンは顔色一つ変えずに言い放つ。

「言ったはずだ。これは”昆虫”革命だと。そこにお前たちは初めからいなかったんだ。」

羽なし達は次々と追い出されていく。子供も夫人も

関係なく。ジャグラはもう柔かい土を感じることもできなくなっていた。ようやく抜け出した支配に再び訪れた支配。スピードがジャグラのもとに飛んできた。何か話しているようだがジャグラの耳には何も入ってこない。そしてジャグラの番が来た。ジャグラを再び地獄へと引き戻そうとする悪魔のような鳥を、スピードが必死に止めている。演説台の上、王のように佇むガブレオンをジャグラは見つめた。今度は目があった。傲慢な態度に、冷酷な瞳、その姿にジャグラは見覚えがあった。そして自由を失う一歩手前でジャグラは言った。

「なあスピード、俺は今、初めて蝶と蛾の見分けがつかなくなったよ。」



【佳作】

人間のこと猫のこと

福山暁の星女子高等学校 一年

石井 里奈
いし いり な

「ふあ、マロおはよう。」

僕の名前はマローネ。今、起きてきたのは半年前に僕
の飼主になってくれた芭奈ちゃん。

僕はもともと猫を保護してくれる施設で半年ぐら
い過ごしたんだけど、ちらほら雪が舞い始めた十二
月のある日、芭奈ちゃんが僕を引き取ってくれた。ど
うやら一目惚れだったらしい。目が合った瞬間、この
子にしようと思ったんだって。うれしいよね。

家についてから僕の顔を覗き込んで芭奈ちゃんが
言った。

「君はきれいな茶色の毛をしているね。そうだ、イタ
リア語で茶色のことをマローネっていうんだって。だ

から、今から君の名前はマローネ。だけどちよつと長い
から、マロって呼ぶね。マロ、これからよろしくね。」

こうして僕はマローネになった。

施設も悪くなかったけど、今の家で過ごす方がよっ
ぽど楽しいし、幸せだ。なんて言たって、優しくてか
わいがってくれる大好きな芭奈ちゃんと一緒だから。

しとしと雨が降る梅雨の朝。

「マロ、今日も学校だよ。毎日学校で疲れちゃう。し
かも今日は模試があるんだよ？ いい点とりたいなあ。
ねえねえマロ、代わりに学校行ってくれる？ って人間
でもないしだめか。猫はいいな。好きな時に寝れるん
だもん。一日だけでも替わってほしいよ。」

「ニヤ」

何で芭奈ちゃんは毎日嫌なところに行くんだろう。
そんなに嫌なら行かなきゃいいのに。僕だったら行か
ないのになあ。

そう言いながらも芭奈ちゃんは学校に行く準備をする。髪を整えたり、制服に着替えたり。そして朝ご飯を食べるために下に降りる。もちろん僕もついて行くよ。

「芭奈、おはよう。」

この人は芭奈ちゃんのお母さん。僕のことをかわいがってくれるいい人。

「マロもおはよう。」

「ニャー」

そう言ってお母さんはミルクとキャットフードをくれる。いつも通りの食事だ。

「お母さん、今日模試があるんだけど低い点とっても怒らないでね。」

「怒るわけないじゃない。今まで頑張ってきたんだから。自分の力を信じて頑張ってるね。」

「うん、ありがとう。」

そう、今日は芭奈ちゃんにとって大事な日。この日

のために芭奈ちゃんが夜遅くまで勉強してたの僕知ってる。

「じゃあお母さん、マロ、いつてきます。」

「いつてらっしゃい。」

「ミー」

芭奈ちゃんは学校へ行くために家を出た。嫌なことをしに行くのに。人間って不思議な生きものだ。ダイエットと言ってお腹が鳴っているのにご飯を食べなかったり、きついと言いながら筋トレというものをしたり、悲しいときに笑ってみたり。どう頭を捻っても猫には理解できないこともまだまだある。

あーあ、僕暇になっちゃった。そうだ、隣の家のネロに会いに行こう。あ、ネロっていうのは、僕の猫友達ね。

「ニャー（ネロ）」

「ニャー（よお、マロ）」

「ニャー（おはよう）」

「ニャー（おはよう）」

それから僕とネロはネロの家の縁側の下で雨宿りをしながら数分間近況を話した。

「そうそう、ネロ。今日ね、芭奈ちゃんが学校行きたくないって言ってたよ。」

「なんで？」

「学校行くと疲れるんだって。何か僕にできることないかなあ。学校がなくなればいいのかな？」

「うーん。あ。いいこと思いついた。マロ、ちよつと行つてくるところができた。ごめん。また一緒に話そうな。」

「うん、分かった。」

そう言うのと、ネロは走ってどこかに行ってしまった。

僕と雨音だけが残された。

雨が止み、夕日が久しぶりに顔を出した頃。

「ただいまー。」

声を聴いただけで疲れているのがわかる。

「芭奈、おかえり。」

キッチンの奥からお母さんが声をかける。芭奈ちゃん帰ってきた！僕はうれしくて芭奈ちゃんに飛びついた。

「マロ、ただいま。」

「ニャー」

「芭奈、模試どうだった？」

「それがさあ、後日になったんだよね。なんか、模試中に猫が入って来てすつこい暴れて模試どころじゃなくなつて。」

やったね、嫌なことしなくてよかったね、サイコーじゃん。

「そうなの。でも日にちが伸びて勉強時間が伸びるからよかったと思えば？」

「うーん、でも今日に向けて勉強してきたわけだし、せつかくやる気になつていたのになんかリズムが崩れちゃう。模試なくなつたのはうれしいけど、でもやらないと行けないことが先延ばしになるのはちよつと大

変かなあ。」

はあ？どういふこと？嫌なことしなくてよくなったのに、それも嫌なの？もう、人間って全然分らない！

僕はこの時、朝ネロと会話したことを思い出した。もしかして芭奈ちゃんの言っている猫ってネロのことじゃない？芭奈ちゃんが寝たら、ネロに確かめに行こう。僕はそう決意した。

その日の夜のこと。

「さすがマロ、察しがいいな。そう、ひと暴れしてやったぜ。大人たちは大慌てで俺を追いかけるし、学校中が大騒ぎだったぞ。さぞ、学生たちは喜んだだろう。」

「僕のためにありがとう。でも、芭奈ちゃんうれしそうじゃなかったんだ。」

「どういふことだ？」

これ以上なく目を見開いてネロは聞いてきた。

柔かい月の光が降り注ぐ中、僕たちは人間の考えることはわからないとお互いに話し家に戻った。

七月の蒸し暑い日、朝からセミの声がよく響いている。こんな日はエアコンの効いた部屋でのんびりするのが一番。と、バタバタと足音がして芭奈ちゃんが僕に駆け寄ってきた。鼻と鼻がぶつかりそうな距離だ。

「やっと模試も終わったし、夏休みになったよ。マロ、これから予防接種に行くからね。」

ヨボウセツシュ？僕の目の前が真っ暗になった。痛いあれじゃないか。嫌だ、嫌だ、嫌だー！必死に逃げようとする僕はケージに入れられ、車に乗せられ、お母さんの運転で動物病院に連れていかれた。

その後のことは無我夢中でよく覚えていないが、

「とても元気な猫ちゃんですね」

「飼い主さんのここを押さえてください」

「一瞬でいきますよ」

台の上に乗せられ人間に押さえつけられて予防接種となるものを打たれた。僕のありったけの抵抗は無に終わった。

家に帰って解放されてから芭奈ちゃんが話しかてくる。いつになく真剣な眼差しだ。

「こら、マロ、大人しくしないと駄目じゃないか。」

頭をコツンとされる。

「少しくらい痛くてもガマンしなきゃ。マロのためなんだからね。」

え、僕のため？何で？

「マロが病気になって死んじゃうとか、絶対にイヤだよ。そうならないために、ずっと一緒にいられるための予防接種なんだから。分かった？」

もちろん僕も元気でずっと芭奈ちゃんや家族のみんなになりたい。

嫌なことでもガマンしなきゃいけないことがある…か。この前の芭奈ちゃんもこんな感じだったのかな。

まだまだ人間のこと分からないことが多いけど、少しだけわかったような気がしたよ。ネロにも教えてあげよう。窓の外を見ると真っ白なカスミソウが風に揺れていた。



【佳作】

まほうのノート

福山暁の星女子高等学校 1年

くだ
わかな
佃 和佳奈

僕はフツの小学一年生。そんな僕には悩みがあるんだ。それは、ぼくがすごくフツだつていうこと。同じクラスには、絵が上手な子や、ピアノが弾ける子、足が速い子がいて、みんながすごいねってその子たちを褒めるんだ。今日も、隣の席の友達が、かけっこで一番になって褒められてた。

僕にも何か、そんなすごいところはあるのかな？僕は家の近くの大きな木のある原っぱへ行つて、その木の木陰で考えてみた。生き物や自然が大好きな僕はこの場所がすごく落ち着くんだ。すると、一匹の子猫が僕の近くにやって来た。よく見るとすごく痩せてたんだ。僕のおやつを分けてあげると、その子は嬉

しそうにおやつをくわえて走って行った。そして僕はまた考え始めた。しばらくすると、後から声が聞えた。

「何をそんなに真剣に悩んでいるんだい？」

振り返ると、僕のおばあちゃんが立っていた。それで、僕は答えたんだ。

「僕がフツで、これといって褒められるようなすごいところがないってことに悩んでるんだ。」

するとおばあちゃんは少し笑って言った。

「さっきだって、子猫におやつを分けてあげていたじゃないか。動物に優しく出来るところがすごいところだと思うよ。」

それでも僕は言った。

「動物に優しくできたって、学校の友達は、だーれも褒めてくれないよ。」

すると、おばあちゃんは言った。

「周りの人から褒められるのは、そんなに大切なこと

じゃないんだよ。」

「え！そうなの？」

僕は驚いて言ったんだ。するとおばあちゃんは、

「そう。一番大切なのは、自分で自分を褒められるようになることなんだよ。」

と言ったんだ。でも、僕は納得できなかった。

「うーん。でも、僕は周りの人から褒められる方が嬉しいと思うな。」

するとおばあちゃんは言った。

「じゃあ、コンテストのときを想像してみて。自分がズルをして優勝したとしよう。でも、ズルをしたことを知らない周りの人たちは褒めてくれるよね。でも、自分はズルをしたって知ってるから、自分で自分のことを褒められないよね。」

「うん。確かに。」

おばあちゃんは続けた。

「それとは反対に、こんな場面の時、自分で自分のこ

とを褒められるようにするにはどうしたら良いかな？」

おばあちゃんは僕に聞いたんだ。だから僕は

「たくさん努力して、自分の力で頑張れば、自分で自分を褒められる。」

と答えた。おばあちゃんは、

「でしよう。自分がした良いことも、悪いことも、全部知っているのは自分だけなんだ。でも、周りの人々は、その行動の一部しか知らない。だから、自分で自分を褒めるのは、周りの人から褒められるのよりも、ずっとずっと難しく、すごいことなんだ。」

と言った。そして僕は思ったんだ。

「確かにそうだね。僕も、自分で自分を褒められるようになりたい！でも、どうすれば良いの？僕の褒めるところなんて見つからないよー。」

すると、おばあちゃんは、青色のノートをかばんから取り出して、僕に渡してくれたんだ。

「ありがとう。でも、これは何？」

僕は聞いた。するとおばあちゃんは言ったんだ。

「これはね、まほうのノートだよ。」

「まほうのノート？」

僕が尋ねると、おばあちゃんは、

「そう。これは、自分で自分を褒められるようになるための手助けをしてくれるんだ。」

と答えてくれた。

「どうやって使うの？」

僕はまた尋ねた。

「毎日、寝る前に、今日の自分がした褒めてあげたいことを十個以上書くんだ。それを、このページの最後のページになるまで毎日続ければ、まほうの効果が見えるよ。」

「十個なんて、そんなにたくさん褒めることを見つけられないよ！」

僕は言ったんだ。すると、おばあちゃんは笑って言っ

た。

「十個なんてすぐに書けるよ。なにも、そんなに難しく考えなくても、小さなことでも書いて良いんだよ。例えば、お血洗いを手伝ったとか、友達に花の名前を教えてあげたとか。」

僕は、なんだかできるような気がしてきた。

「ありがとう！やってみるよ。」

そして、その日の夜、早速まほうのノートを開いて、今日の自分の褒めてあげたいことを十個書いてみた。
『①お花に水をやった。②お血洗いを手伝った。③きちんと挨拶ができた。④学校のウサギにエサをやった。⑤友達が落とした鉛筆を拾ってあげた。⑥遊んだおもちゃをきちんと片づけた。⑦犬の散歩をした。⑧友達が捕まえた虫の飼い方を教えてあげた。⑨教室に落ちていたゴミを拾った。⑩草むしりをした。』

「よし！書けた。」

書いてみると、思ったよりも自分の褒めたいところ

がたくさんあることに気付いたんだ。

そして、毎日毎日、寝る前にまほうのノートを書き続けた。そのうちに、十個だけじゃなくて、二十個も書けるようになっていたんだ。すると、気付いたら、ノート一冊使い切っていた。それに、あることに気付いたんだ。

「あれ？まほうのノートを一冊使い切れれば、まほうの効果が現れるっておばあちゃんが言ってたけど、効果が現れない気がする。」

僕は心配になって、急いでおばあちゃんのところへ走って行った。

「おばあちゃん！まほうの効果が現れないよ！正しい方を間違えちゃったのかな？」

僕は言った。すると、おばあちゃんは笑い出したんだ。

「どうして笑っているの？」

僕は不思議になって尋ねた。するとおばあちゃんは言ったんだ。

「まほうの効果は、もうとっくに現れているじゃないか。」

「えーそうなの？どこ？」

すると、おばあちゃんは言った。

「じゃあ、おばあちゃんが確かめてあげよう。これから尋ねることに答えてね。自分のすごいところはどこ？」

僕はすぐに答えた。

「僕のすごいところは、生き物に優しくできるところと、ごみ拾いや草むしり、片付けをして、みんなが過ごしやすい環境を作れるところ！このことは、はつきりと目に見えて分かりにくいから、褒められることは少ないけれど、僕はこれができることを誇りに思っているんだ！」

すると、おばあちゃんは微笑みながら言ったんだ。

「ほらね、まほうの効果が現れてるじゃないか。自分で自分のことを褒められるようになってるよ！このノートを使う前は『褒めるところなんて見つから

ないよー。』って悩んでいたでしょう?」

「確かに!」

僕はそう思ったんだ。するとおばあちゃんは言った。

「まほうのノートは、毎日ちよつとずつ効果が現れるから、その効果に気付きにくいんだよ。でも、自分で自分を褒められる、素敵な自分になっているんだよ。」

「そうなんだね!でもちよつと待って:僕はもう、まほうのノートを使い切っちゃったよ。どうしたら良い?」

するとおばあちゃんは、僕に小銭を渡しながら言った。

「近所の文房具屋さんで買っておいで。」

僕は驚いて言った。

「え!まほうのノートなのに、お店で売っているの?」
するとおばあちゃんは答えた。

「もちろん売っているよ。まほうのノートはその人の心を成長させるものだから、誰が、どのノートを使っ

ても、きちんとまほうがかかるんだよ。だから、何のノートを使っても良いんだ。」

「なるほど!おばあちゃんありがとう。じゃあ買ってくるね!」

僕は走ってノートを買に行った。

さあ、そのあなたも、まほうのノートを用意して、自分で自分を褒められる、素敵な自分になっているこ
う!

【選考委員特別賞】

大きな木

福山暁の星女子高等学校 1年

二宮 果穂
にのみや かほ

そこには木があった。大きな大きな木。その木は見るだけで圧倒されるような木で、大地の凄さ、広さ、大きさを物語っていた。青い空、ピンクがかった雲は大きな木をより際立たせている。同時にこの木は生きているという強い生命力をも感じさせた。木は自分の姿に誇らしく思っ、自慢げに堂々と胸を張って立っていた。

ある秋の日、一人の人間がその大きな木となりを通った。その凄さに腰を抜かした男は何かを思い付いたような顔をして去っていった。木は「なんなんだ。」と思いながら、寒い一夜を過ごした。その夜は風の強い夜だった。暗い中で輝く月光はほんのり木を

照らしていた。翌日の早朝、再び人がやってきた。今度は一人だけでなく、三人に増えていた。男たちは木の幹を触り、枝を突き、土を何度も踏み、近くで見つめてきた。そして、つぶやいた。

「いい木だ。」

木はやはり何をして、何を言っているのか分からなかった。その夜、人間たちはこの木を切って神殿を作ろうと決めていた。そしてこの木は神殿の重要な柱になる予定だった。そのことは木の耳まで届いた。木は悔しかった。

「何故、こんなに立派に育ったのに……。何故切られなければならないんだ。もっと生きたい。もっと大きくなりたい。」

木はそう思った。しかし、そう思っても木はただ立ち尽くすことしかできなかった。

それから、一日、また一日と日が過ぎるのは早かった。葉は赤へと色を変え、葉を落とし、雪を積もらせ、

いつの間にか春になった。やっと温かい日差しに周りの植物もイキイキと芽を生やした。そうして、切られることを忘れてしまいそうになる頃、人間たちが現れた。人間たちは言った。

「やはり良い木だ。こんな木は滅多に見ない。いい神殿になるだろう。」

そんな人間のうち、一人が木につぶやいた。

「ごめんな。お前は立派に育ったよ。おれはお前のもつと成長した姿をみたい。でも一人だけでは何もできない。ごめんな…。」

と言った。木はもう何もできない現状に諦めがついた。と同時に涙がこぼれ落ちそうになった。

切られる日の前夜、木は仲間たちに伝えた。

「おれは悔しい。もっと、もっと、大きくなりたかった。」

周りの草木が言った。

「お前は本当によく頑張ったよ。動物たちには住処を与え、空気を綺麗にした。そんなこと、僕たちには

できない。立派で大きな木のおまえだからできたことだ。それに神殿の主要な木として使われることなんて普通ない。名誉なことだ。もっと自分を誇りに思う方がいい。」

木は黙り込んだ。周りも静寂をつらぬき、辺りは風で葉が揺れる音しかしなかった。何秒、何十秒かして、木が口を開いた。

「ごめんな…。おれのせいで…。ごめんな…。」

仲間たちは木が何を言っているか、さっぱりと分かっていなかった。木は続ける。

「おれが…、おれがこんなに大きくなってしまったばかりにお前たちの分の栄養まで吸い取ってしまった。たまにしか降らない雨もおれがそのほとんどを取ってしまった。影を作ってしまったことでお前たちは太陽の光を浴びれなくなってしまった。」

周りの草木たちは驚いた。いつも堂々としていて、誰にも頼ったり弱みを見せることなんてないのに、こん

なことを考えていたなんて、草木たちには考えることもできなかった。そして周りの草木も口を開いた。「ぼくたちにはお前がいなければ、土壌が安定しなくて、こんなに安心して暮らせなかったと思う。ぼくたちはそれぞれに頼り合って生きている。これが共生だ。ぼくたち生物は互いに共生しないと生きていけない。言わば自然の摂理だ。そんなに悪く思わないでくれよ。」

木と仲間たちは最後の夜をかみしめながら語り合った。それは、長い夜だった。みんなにとってその夜はずっと続くように思えた。そう願った。

翌日の朝、人間たちがやって来た。木は以前と比べものにならない程、凛々しかった。全てを吹っ切ったような雰囲気とどこか寂しそうなのが混ざり合って、魅力的な雰囲気を醸し出していた。木が切られる時、みんなそれぞれにつぶやいた。

「ありがとう。」

【久留島武彦記念館館長特別賞】

幸せのスパイス

福山暁の星女子高等学校 1年

戸田 舞とだ まい

ここは幸せの森。みんな毎日元気いっぱい。なぜかって？それがトトのレストランがあるから……。

トトのレストランは森一番。隣にある光の森や水の森からもたくさんのお客さんがくる大人気店です。トトが作る料理には特別なスパイスが入ってて、食べればびっくり、ほっぺたが落ちちゃうくらいの美味しい料理がでちゃいます。森のみんなはトトの料理を幸せの料理と呼んでいました。

ある日、トトのレストランに一通の手紙が届きました。何と遠い国の王様が是非とも食べたいと申し出てきたのです。トトは大喜び。森のみんなも大喜び。トトはさっそく王様のところに行く準備をしました。

大きなリュックにいつも使う道具を入れて、（特別なスパイスも忘れず）準備完了。次の日の朝、王国からお迎えの馬車が到着しました。トトはみんなに見送られながら馬車に乗ってお城へ向かいました。丘を越え、川を越え、山を越えて……。

トトの胸はドキドキ。一方、こんな心配がありました。

「どんな国なんだろう……。」

実は、どこにあるのか、どんな国なのかトトは何も知りませんでした。ただ、馬車についている紋章がどこか見覚えがある気がしていました。

考えているうちに、馬車はだんだん険しい道を進むようになり、気がつけば薄暗い場所に来ていました。

「到着です。」

家来に言われて馬車から降りてみると……なんとびっくり。そこには闇の森、ムク王の城だったのです。ムク王は闇の森を支配する王で、いつも悪さばかり

していました。闇の森にすむ人々はみんな疲れていて笑顔がありません。トトはお城についてやっと紋章がムク王のものだったことに気付いたのです。

「幸せの森から、トト様、おなあーりー。」

城中に響き渡る声。トトは怖くてガタガタ震えながら進んでいきました。

ついにムク王がいる大広間までやってきました。

「ようこそ、闇の森。よくぞここまで来てくれたね。私はムク王だ。私は君の料理が食べたくて食べたくなしょうがない。早く作ってくれたまえ。」

ムク王は我慢ができないようで、せかせかとしています。トトは深呼吸してから

「ありがとうございます。今回はとびきりおいしい料理を振舞わせて頂きます。」

と、丁寧にお辞儀をしてお城のキッチンに向かおうとしました。その時、ムク王が言いました。

「待て、私の目の前で作りなさい。」

トトはびっくり。トトはこれまで、大勢の人に見られながら料理をしたことがなかったのです。それにあの大切なスパイス。あれは誰にも見せたことのないスパイスでした。不安と緊張の中、目の前には瞬く間にキッチンが運ばれてきます。トトは大きく深呼吸をして、自分に言い聞かせました。

『大丈夫。僕ならできる、いつも通りやればいいだけさ。』

キッチンに向かい、いつものように丁寧に丁寧に想いを込めて作っていました。いい香りが立ち込めてきました。さあ、いよいよ最後の仕上げです。あの特別なスパイスを入れる時がきました。特別なスパイスを王様の前で一振り、二振り。しっかり混ぜた後、お皿に盛りつけていきました。その見た目や香りと言ったら、言葉を失うほど素晴らしく、ムク王もその家来達も、うっとりする料理になりました。

「お待たせしました。レストランイチオシのスペシャル

ポトフになります。幸せの森で取れる食材をふんだんに使った一品です。」

ムク王は

「ほほう」

と言うと、一口食べました。なにも言いません。なにも言いませんが、一口目から止まらないのかほとんどん食べていきます。あつという間に完食。さすがのトトも驚いてしました。ムク王はニコニコしています。

「実に美味しかった。さすがは幸せの森だ。いい食材がたくさんあるようだな。」

トトはゾツとしました。まるで何かを狙っているように感じた。さらにムク王は続けます。

「特にあれだ。あのスパイスだ。実に珍しく興味深い。」

ムク王はトトを見てニヤリとしました。トトはあまりの恐怖に逃げ出そうと思いましたが、体が震えて全く動きません。ムク王が合図すると周りにいた家

来が一斉に取り囲み、トトは家来に捕まってしまいました。さらに大切なあのスパイスまでもムク王に奪われてしまったのです。

「はっはっは。ついに手に入れた。このスパイスを探して何年たったことか。」

ムク王はトトを見て続けます。

「幸せの森の人々はお前の料理を食べて幸せになるという。その料理には不思議なスパイスが使われているとか。噂には聞いていたが本当にあるとはな。これさえあれば私は幸せになれる！」

ムク王は特別なスパイスを掲げて大きな声で笑い、奥の部屋に消えていきました。トトは縛られた後、暗い牢屋に入れられてしまいました。

『これからどうなるんだろう……。』

トトは涙が出てきました。

「喜んでもらえると思って作ったのに幸せを感じてもらえないと思って頑張ったのに。牢屋に入れられて…

…特別なスパイスまで奪われるなんて……。」

特別なスパイスはトトのお父さんから受け継いだ大事なものでした。スパイスの正体はお父さんしか知りません。でも一度だけお父さんからこのスパイスを作った理由を教えられたことがありました。

「お父さんはね、料理でみんなを幸せにしたいんだよ。美味しい料理は元氣も出るし、笑顔も生まれる。どんなに大変でも、この料理を食べれば頑張るぞ！って思える。そんな幸せを生む料理を作りたいと思ってるね。」

トトはこの言葉を思い出した後、ハツとしました。

「そうか！王さまは本当の幸せを感じたことがなかったんだ。」

その通り。ムク王は小さい頃からずっと独りぼっちで寂しい思いをしていました。いつも高い塔に登っては幸せの森を羨ましそうに見ていたのです。自分の国は幸せの森とは全く違います。人々は元氣がなく

て、笑顔もなくて。幸せそうな幸せの森の人々のようにしたかったけれど、方法がわかりませんでした。

そこで目をつけたのがトトが使う特別なスパイス。そのスパイスでみんなを元氣にしようと探していたのでした。

『お父さんが作った特別なスパイスは幸せの種。食べたからにはきつと、優しい気持ちを取り戻すはず。』

トトは、ムク王が優しい心を取り戻し、牢屋から出してくれるのを待ちました。

その頃ムク王は、やっと手に入れたスパイスを使ってさつそく料理を作らせていました。ムク王はトトの料理ですでに元氣いっぱい。早くみんなも幸せの森の人々のように元氣にしたかったです。まずは家来たちに料理を食べせました。が、なにも変化が起きません。ムク王はトトが作った料理でこんなにも元氣が出ているのに、家来たちは元氣が出るところか、いつも以上に疲れてしまっています。

「そうか。スパイスが足りなかったか。」

ムク王はスパイスを倍にして食べさせました。しかし、家来たちは食べれば食べるほど、元気をなくしていきます。

「くそっ。騙された。」

ムク王はかんかんに怒ってトトに罰を与えようと思いました。しかし、急に心苦しくなったのです。

『自分は人のものを勝手に奪っておきながら、罰まで与えるのか。』

ムク王はしばらく考えて、トトを自分のところへ連れてくるように命令しました。

トトは喜んで出ていきました。

ムク王はトトに聞きました。

「わしはお前の料理を食べて元気が沸いた。でも家来たちは、食べても食べても元気が出ない。それどころかどんどん元気をなくしていつている。どういふことなんだ。」

トトはにっこり笑ってムク王に教えました。

「王様、料理で大切なのは気持ちです。食べてくれる人が居ること、食材があることに感謝すること。これから食べる人に幸せを届けられるように愛情をこめて作ること。これが一番いいスパイスなんです。この特別なスパイスはこれらの気持ちがないと本当の力を発揮しないのですよ。」

「そうか……。そうだったのか。」

ムク王はトトが使うスパイスを入れればなんでもおいしくなると思っていました。でも本当は、作る時の気持ち最後のスパイスを特別にするのだと知ったのです。王様はトトに教えてもらいながら、

「美味しくなれ、美味しくなれ」

と心を込めて作り直しました。心を込めて作った料理は大成功！村の人たちもみんな元気を取り戻し、ムク王も優しい王様になりました。

ムク王はトトが帰るとき、お詫びとして、この森でよくとれる果物をたくさんくれました。あまりにも多いのでリュックに押し込んでいると、その果物が一つ、コロコロと落ちて割れてしまいました。割れた果物からは、トトが持っている特別なスパイスの香りが！

トトのお父さんが作ったスパイスは、この森の果物と同じものだったのです。ムク王は喜んでその果物にスマイルフルーツと名付けました。それからというもの、闇の森は笑顔の森と呼ばれるようになり、幸せの森と同じようにみんな幸せに暮らしました。

【読売新聞社賞】

お空のお菓子屋さん

徳島県立脇町高等学校 2年

あらおか
みき
荒岡 美希

お空に浮かぶ雲の上、お空で暮らす鳥たちに大人気の小さなお菓子屋さんがあります。お店の名前は「わたぐも屋」。白くてふわふわの雲みたいなひげを生やしたミミズクのおじいさんが一人でお店をやっています。お店にはおじいさんがお空のかけらを集めて作った不思議なお菓子たちがいっぱいいてお店の外までいいにおい。そのにおいにつられて毎日鳥たちがやってきます。

広くて真っ青なお空に明るくてポカポカのお日様が浮かぶよく晴れた日、小さなススメがやって来ました。

「いらっしやいませ。どんなお菓子をお探しかね？」

ふわふわのひげを整えながらミミズクのおじいさんはススメに尋ねました。

「俺はね、今日みたいなよく晴れた日がとても好きなんだ。だから、今日のお空にぴったりなお菓子を選んでほしいんだ。」

ススメがそう言うときミミズクのおじいさんは

「どれどれ。」

と言いながら立ち上がり棚をガサゴソあさはじめました。しばらくすると

「こんなのはどうかね？」

と上に真っ赤なサクラランボを乗せたきれいな青色のゼリーを選んできました。

「これはね、今日みたいな青空のかけらを集めてつくったゼリーなんだよ。お日様はあつすぎて食べられないから代わりにお日様みたいに真っ赤なサクラランボをのつけたんだ。食べてみてごらん。」

ススメはおじいさんから青空色のゼリーをもらう

と、あつと言う間にぺろりとたいらげました。

「おじいさん、これすごくおいしいよ！見た目も味も青空みたいにとびきりさわやかだ。」

ニコニコの笑顔でスズメはうれしそうに

「俺このお店をすごく気に入ったよ。また来るね。」

と言った。するとおじいさんもうれしそうに

「そうかいそうかい、またおいでよ。」

とスズメを見送りました。

お空がすっぱりモクモクな雲に包まれた曇りの日、大きな白鳥がやって来ました。

「いらつしやいませ。どんなお菓子をお探しかね？」

ふわふわのひげを整えながらミミズクのおじいさんは白鳥に尋ねました。

「うーん、どんなお菓子にしようか迷っちゃうな。そうだ、おじいさんのおすめはどんなお菓子なの？」

白鳥がそう聞くと

「そうだね、わしは雲が好きなんだよ、だから雲のか

けらで作ったお菓子はどうかかな？」

「いいね、それをちょうだい。」

白鳥がそう言うのとミミズクのおじいさんは

「どれどれ。」

と言いながら立ち上がり棚をガサゴソあさはじめました。しばらくすると

「こんなのはどうかね？」

と真っ白でふわふわのわたあめを選びました。

「これはね、今日みたいな曇り空のかけらをくるくると集めて作ったわたあめだよ。食べてみてごらん。」

白鳥はおじいさんからふわふわのわたあめをもらうと、パクパクとゆっくり食べ終えました。

「あまくておいしいわね、おスズメにしてよかったわ。」

白鳥は満足した顔で「またね。」と言うと、おじいさんはニツコリ笑って「待っているよ。」と白鳥を見送りました。

シトシトと雨が降ってお空がうす暗い雨の日、黒色

のカラスがやって来ました。

「いらっしやいませ。どんなお菓子をお探しかね？」

ふわふわのひげを整えながらミミズクのおじいさんはカラスに尋ねました。

「えーっと、その…。」

カラスはモジモジしていてなかなか答えません。

「どんなお菓子でもあるから、心配せずに言っってください。」

おじいさんが優しく言います。するとカラスは

「僕はね、今日みたいな雨の日が好きなんだ、雨ってキラキラしていてきれいだから。でもね、友達はみんな羽が濡れてしまうから雨が嫌いなんだ。だから、雨が好きなんで変だってみんなに言われる…。」

と悲しそうに言いました。カラスがそう言うときミミズクのおじいさんは、

「そんなことを言われたら、悲しい気持ちになるよな。どれどれ、少し待っておい。」

と言いながら立ち上がり棚をガサゴソあさり始めました。しばらくすると

「こんなのはどうかね？」

とキラキラ光るこんぺいとうを運んできました。

「これはね、今日みたいな雨の日の雨粒のかけらを集めて作ったこんぺいとうなんだよ。キラキラ光ってとてもきれいだろう。食べてごらん。」

カラスはおじいさんからこんぺいとうをもらって、そっと一粒食べました。

「とってもおいしい。嫌われ者の雨でもこんなにおいしいお菓子になるんだね。」

カラスが言うとき、おじいさんは優しい笑顔で

「そうだね、どんなお空でもとびきりおいしいお菓子になるんだ。晴れも曇りも雨もぜんぶ同じお空なんだ、どんなお空が好きでもいいんだよ。全然変なことなんかじゃないから安心なさい。」

と言ってくれました。カラスはうれしそうに

「うん、これからも雨を好きでいるよ。おじいさんは、
げましてくれてありがとう。」

と言いました。

「またいつでもおいで。」

とおじいさんはカラスを見送りました。

今日も『わたくも屋』には、おいしいお菓子が並び
ます。みんなもいつか好きなお菓子を食べにきてくだ
さいね。

第6回久留島武彦童話賞

《第一次選考委員》

久留島武彦記念館 事務局長 武石 洋子
久留島武彦記念館 副館長 柳井 田博隆

《最終選考委員》

絵 本 作 家	いしいつとむ
有限会社 花書院 絵本専門士	柴 田 香
絵 本 セラピスト	武岡 寿美
玖珠町教育委員会 教育長	梶原 敏明
久留島武彦記念館 館長	金 成 妍

第7回久留島武彦童話賞

子ども創作童話コンクール募集要項

募集内容 創作童話 オリジナル作品

募集対象 小学生から高校生（18歳未満）

（ただし、締切日においての学年）

受付期間 令和6年9月1日（日）

令和7年1月31日（金）

発表 令和7年6月19日（木）

記念館ホームページ上で公表

表彰式 令和7年6月下旬

久留島武彦記念館

入 賞 小学生、中学生、高校生の部

・大賞（各1編）・佳作（各2編）

・選考委員特別賞・久留島武彦

記念館館長特別賞（該当の場合のみ）

・読売新聞社賞

その他

・入選作品の著作権は、久留島武彦記念館に帰属される。

・応募原稿用紙は返却しません。

・入選作品は学校名、氏名、学年を表示して作品集にします。また、ホームページやその他のメディアで発表します。

応募方法

・小学生の部 400字詰め

原稿用紙3枚以上10枚以内

・中学生の部 400字詰め

原稿用紙5枚以上30枚以内

・高校生の部 400字詰め

原稿用紙5枚以上30枚以内

① 作品は、手書きによること。

② 原稿用紙の右側をホッチキスなどで固定してから提出してください。

③ 表紙にはタイトルと名前、学校、

学年（年齢）、枚数を記入し、作品にはページ番号を記入してください。

応募先 〒879-4404 大分県玖珠郡

玖珠町大字森855番地

久留島武彦記念館

TEL0973-73-9200

第6回 久留島武彦童話賞

子ども創作童話コンクール

受賞作品集

二〇二四年六月二十七日 発行

編集 久留島武彦記念館

〒八七九―四四〇四

大分県玖珠郡玖珠町大字森八五五番地

電話 〇九七三―七三―九二〇〇

FAX 〇九七三―七三―九二〇一

発行 いづみ印刷 株式会社

〒八七〇―一―一七

大分県大分市高江西一丁目四三二二―二五

※本書の無断転載・複製を禁じます。

※作品集の編纂にあたり、応募作品の、①誤字・脱字、②ひらがなを漢字へ変換、③不適切な言い回し等は適宜、修正させていただきました。

くるしま童話名作選

『くるしま童話名作選』は、久留島先生の没後50年を記念して大分県玖珠町「久留島武彦」顕彰記念事業実行委員会より2010年度から企画出版され、くるしま童話を現代によりみがえらせ、多くの子どもたちに届け続けています。

現代の子どもたちが楽しめるように言葉や見開き、読み聞かせた時の耳から聞こえる語感にこだわり、画家も日本の絵本画家を代表する方をお願いして作画していただきました。



『ともがき』

作 久留島 武彦
絵 古内 ヨシ



『子どもいのり』

作 久留島 武彦
絵 古内 ヨシ



『ゆめうりふくろう』

作 久留島 武彦
絵 遠山 繁年



『トラの子ウーちゃん』

作 久留島 武彦
絵 篠崎 三朗



『すずむし』

作 久留島 武彦
絵 黒井 健



『ツバメのおながえし』

作 久留島 武彦
絵 篠崎 三朗



『月宮殿のおつかい』

作 久留島 武彦
絵 アヤ井 アキコ



『海に光るつぼ』

作 久留島 武彦
絵 ゴトウノリユキ



『弾きがえる』

作 久留島 武彦
絵 市居 みか



『なだれうさぎ』

作 久留島 武彦
絵 いしいつとむ

『くるしま童話名作選』は、久留島武彦記念館および全国の書店で購入することができます。

※店頭がない場合は、注文の上ご購入下さい。

各作品 定価：1,300 円＋税